暴虐の宴

京野美波

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
暴虐の宴

【Ｎコード】
Ｎ１８４７ＧＬ

【作者名】
京野美波

【あらすじ】
東南アジアの某国に有るレストランで繰り広げられる暴淫暴虐拷問の宴。材料は全て揃える。
世界的な組織が食材・女性を世界から調達。
ＳＭ官能と言うより、ＳＭ拷問小説

（前書き）

銀色のナイフが白い肌の肉に食い込む。白い山肌の丘には木苺が不釣り合いに乗っている。肉とミスマッチな組み合わせだが赤と白のコントラストが何故か合っていた。蒸した後の肉はスーッと切れ、切り口からは肉汁と鮮血が滴る。フォークを切った肉片に刺し、初老の婦人は口に運ぶ。銀髪がカールして、赤いドレスが上品な婦人に似合う。若い頃は美人であったであろう鼻筋が通った眼元は真紅のマスクで覆われている。中世ヨーロッパの晩餐のような風情で有る。男性はタキシードか軍服姿。女性はドレスを纏っている。テーブル席は3席。一段上がった所にカウンター席がある。テーブル席の前にはステージが有り、ステージ上に大型モニターが設置している。東南アジア某国に有る海沿いのレストラン。カニなどの甲殻類が名物
毎月１０日は貸し切りになり宴が繰り広がられる。

第一章　食器　ユミ　リカ　リエ

中野区某所の公園。辺りはラブホテル街でチラホラと公園ベンチには男女が座り、暗くなるのを待っている。

ベンチから離れた場所に少し大型の公衆トイレが有る。

中から笑い声が聞こえている

公園の入り口の駐車場に、黒いワゴンと白い高級車が止まった。

ワゴンからは黒い上下のスーツに実を包んだ黒人が2人と若い男達が降りて来た。

若い男達は上下ダボダボのスウェットやラスタカラーのジャージなどのカラフルな格好。

2メール近い黒人のゴツさと若い男達のチャラさがおかしい。

「お前達！もう少しおとなしめの服は無いのか？」

「ジム！今の流行りだよ！」

ジムと呼ばれた黒人はスキンヘッドに口髭をたくわえ、胸板はレスラー並みに分厚い。「ガイ！お前の頭もはやりか？」

「コレは正装さ」

ガイもジムに劣らずレスラー並みの体格とドレッドヘアに金のネックレスをしている。「ガイさん！この中です。」

スエットがガイに声を掛ける。

唇に指を当て黙れと合図した。

トイレのなかから歓声が聞こえてくる。

多目的トイレの中には少女達が男物のカバンを持ち寄り開けようとしていた。

それぞれが１０代後半に見える。

ユミが３人のリーダー格の様な振る舞いをしているが一番幼さが残り、其の幼い顔を隠すように派手目な化粧をしている。

髪を鮮やかな栗色に染め、眉毛を整えているが、ドングリ眼と少し低い鼻筋と薄い唇が幼さを出している。

３人の中では一番、身長が低く胸も膨らみかけた感じがより一層、幼さを出している。

リカが黒い革鞄のジッパーを引いた。
逆さまにしてトイレの床に振るい落とした。中からは、茶色い封筒、キーケース、名刺入れ、黒い皮財布が落ちる。
直ぐにリカが財布を拾い上げ中味を漁った。「5だって！アイツ8くれるって言ったのに！むかつく！」
リカは端正な顔を膨らませて怒っている
3人の中では一番美形な顔立ちをしている。
父親がアメリカ人で母親が日本人のハーフ。実際リカの誘いには100パーセントで男が引っかかる。
地毛の茶色がかったストレートヘアをボブカットに揃え、眼は青みがかった瞳。
大勢の男達を虜にした。
3人の中では一番身長も高く、歩いていてもスカウトされる程の美貌の持ち主。
ユミは憧れと嫉妬で自分がリーダー感を出しているが、リカにはどうでも良い事だった。
「リカも売るって言って逃げたジャンか！」
リエが笑いながらリカの肩を叩く。
「次はウチ！」
リエが持っていた赤いリュックの紐を解き中味をトイレの床にぶち撒けた。
「あった！」
ビニール製のマジックテープ式の財布が床に落ちた。無造作にベリベリとマジックテープを剥がし紙幣を抜く。
「ショボ財布！うわ！3って最悪だけど！　」
リエは黒髪を肩まで下ろし清楚な顔立ちで日本人形のような典型的な顔が印象的。
ユミは小柄な身体に大きめのニットに腰にベルト。
白いニットの首元は少し大きめに開き肩まで肌が露わになっている。
少しでも大人びた感じを出したいのだろう。リカは黒のミニにベー

ジュのニット、上から黒のライダース風ジャケット。
すらりと伸びた脚が長い。
リエは黒髪清楚感を裏切るような豊満なバストをベージュ色のニットで隠しピンクのジャケットを羽織る。
スカートはフリルが少し入った、ガーリースタイル。
３人共に普通に街中にいる若い１０代の少女達で有るが、週末に出会い系アプリで男を呼んでホテルで隙を見て財布やカバンを抜き取る事をアルバイト感覚にしている。
大概の男たちは幼さに隙を見せる。
隙が無い時はリカの父親の病院からくすねた睡眠薬を飲ませて抜き取る。
この日も3人の男達から、くすねた物を何時ものトイレで開けていた。
公園には池が有り、盗んで金目の物を抜きカバンは池に、沈めた。
「次はウチが開ける！」ユミが黒のミニアタッシュケースを開けようとしていた。
「生意気！鍵が掛かって、るんですけど！リカ！あれ貸して！」
リカが自分のピンク色のバックからラジオペンチを取り出してユミに手渡す。
鍵穴にペンチの先を突っ込み、ペンチの柄を下にしてアタッシュケースを持ち上げトイレの床に叩きつけた。
ガッ！鈍い音がしてアタッシュケースの鍵が壊れたとたんにファッと白い粉が舞い上がる。
「ヤリィ！空いたよ！」
アタッシュケースの中は袋が破れて粉まみれになった
３センチは有る茶封筒と白い封筒。
それにスマホが入っていた。
ユミが茶封筒を拾い上げて中を見た。
「やった！大当たり！３００はあるよ！」
歓喜で声が上ずっている。

リエも驚いた表情で大金を見ている。
でもリカだけは嫌な予感がしていた。
この袋の感じって、先輩の彼氏の所で見たことが有る。
リカは家の病院から睡眠薬をくすめ先輩に流して小遣い稼ぎをしていた。
其の伝で先輩の彼氏がやっていた密売品の薬の袋詰めを見た事がある。
証拠を消さないとまずい！
リカは急いで、袋の中の粉をトイレに流した。
「リカ！何、慌ててんの？」
「ユミ！このアタッシュケースの持ち主ってどんな奴だった」
「普通の２０代後半のリーマン」
「どこかに彫り物は無かった？」
「無い。普通のリーマン。どうしたのリカ？」
「これ、ヤバすぎな金だよ！見つかったら消されるよ！」
「消すって！日本だよ？心配しすぎているよ」
「ばか！冗談は通じない相手だよ！」
「ヤバイよ！このスマホ、電源入っている」バキ！リカがスマホを床に置き踏み潰した。
「逃げるよ！」
「待ってよ！」
「追って来ないって！」
何回も男達から財布を盗んで来たが、大概の男達は警察には相談しなかった。
だが、今回は相手がヤバイ。
トイレの鍵を引き、そっと覗いた途端に
「みっけた！」強引に引き戸を引かれた。
最初にスエット、派手なジャージ、二人を見たとき（半グレグループなら先輩の名前を出せば）
ユミは咄嗟にそう思ったが次に入って来た２メートル近いスキンヘ

ッドの黒人を見て三人は怯んだ。
ユミが「アタシ、のしりあ」ぃと言う前にスキンヘッドの軽い手刀がトンとユミの首元に入った。
カクンとユミはへたりこみスカートが濡れて変色していった。
「オー漏らしたね。ハハハ！」
「ジム！やり過ぎ。売り物だからね。傷はダメ」
「リュウ。ごめん。」
リュウと呼ばれた男は髪型を整えた一見、エリートサラリーマン風な雰囲気を出している。
「リュウさん！コイツら1億を便所に、流したよ！うわ！スマホも、潰した。」
「参ったなぁ。取り敢えず、3人を横須賀のドクターの所に運んで！後で俺もバカ、捕まえて行くから。ケイ！頼むよ！」
「わかりました。」
「歩く？眠る？」
リカ、リサは震えて声も出ない。
「ややこしいから。寝て！」
レイは二人の腕に睡眠薬を撃ち、ジャージとスエットに運ばせた。
「ガイ！バカが見つかったから来るか？」
「楽しみね」
ガイは公園の入り口に止めてある黒のバンに乗り
「ジム！楽しいこと始まるよ。リュウの車を追って」
「オーケー！」
リュウの白い車の後ろを黒いバンが付いて走り出した。
トイレではレイが
「シンジ！車を回して！場所は俺のＧＰＳを見たら分かるから！中野だからすぐな！車はバンにしてくれ！後、拉致用のバックを3個」
２０分ほどでシンジが台車とバックを持って2人、若い男達を連れてやって来た。
「シンジ！コイツら詰めて車に乗せてくれ！後、便所を掃除してく

れ！いつものように！」
「わかりました。レイさんは？」
「リュウさんに言われた荷物を横須賀の病院まで持っていく。」
「ミツオを見つけたからシンジが渋谷の頭な！」
「わかりました！」
シンジの端正な優男の感じからは出ない様な爬虫類系の笑顔が溢れる。
シンジは二年前まで、アイドルグループに所属していた。
クラブで出会った、ミツオの半グレグループと意気投合して遊んでいたが、ドラッグパーティ時の写真を撮られて、強請られていた。
事務所が金を出し解決したが、ミツオ達は週刊誌に写真を売った。
同じグループのジローも写っていて、芸能界から引退になった。
元アイドルと言う事で再度、ミツオ達は接近して来た。
シンジはジローと共にグループに入り、リュウにルックスを買われ歌舞伎町のホストクラブを負かされた。
ミツオ達よりも多く組織に貢献し、グループのナンバー2になり、今回はミツオが下手をした為にトップになれた。
そして、レイよりミツオの今後を聞き喜んだ。

第二章　ナース　ジェニーとリズの身体検査
レイのワゴンに拉致をした三人を乗せる準備が始まる。
膝を曲げて両脚を抱え込んだ体操座りの様な格好をさせて、リカ、リサを先にバッグ詰めた。
「漏らした、この子どうしますか？」
ユミを見て赤の男が叫ぶ
「全て脱がせて服は捨てろ！」
レイがシンジの部下に指示を出す。
「きったね！」
ハサミでニットの首元を裂き、万歳の形に腕を上げさせてニットを脱がした

白路に花柄のブラの紐を切り、同じく花柄のパンティのヒモを切った。
「シンジさん！やったら駄目ですか？」
ユミの肉ビラがピンクのアサリのような秘所を見て、部下の一人が興奮している。
丸坊主に真赤なスエット、サンダル履きで、幼ない顔立ち。野球少年のような感じがする。
「バカ！レイさんに聞こえたらしめられるぞ！」
渋々とユミをカバンに収めて車に台車に載せて運ぶ。
辺りは真っ暗で、カップルも巨体の黒人二人を見て逃げたようだ。
黒いバンに乗せレイに積み終わった事を報告する。
「シンジ！後は掃除屋にすべて綺麗にする様に言って終わりだ。最後で下手、打つなよ！」
「わかりました。レイさん。お疲れ様です。」
レイはダボダボスエットとジャージの男を引き連れて車に向かった。
「シンジさん！誰ですか？アイツら、偉そう、なんだけど！」
「バカ！ウチのグループが所属している上の組織だよ。変な詮索すると消されるぞ」
「わかりました。」
坊主頭にもシンジが彼等を怖がっているのがわかった。
暫くして、銀色の軽ワゴンが公園に入り、中からグレーの作業服姿の男達が降りてきた。
　直ぐにトイレ入り口付近に作業中の看板を置き、トイレの中を掃除して全てを特殊洗剤で拭き取る。
そして、掃除道具を持ち早々と軽ワゴンで走り去った。
組織公認の掃除屋で有る。
すべて跡形も無く掃除してしまう。
いつもの公園の公衆トイレに戻った。
作業を見守ってシンジは公園から去った。
黒いバンは首都高速に乗り一時間程で横須賀に近いインターで降り

る。
辺りは真っ暗闇で街頭と沖に停泊した貨物船の明かりしか見えない。
右手に6階建ての建物が見えた。前方、右手に赤色灯が見える。
車は右折して建物内の敷地を抜けて地下駐車場に入っていった
駐車場地下エントランスにピンク色のナース服の白人女性と褐色の
ヒスパニック系女性が立っていた。
「レイ、3人で良いのかしら？」
白人美女が声を掛けた。
「ジェニーさん。そうです。自分達で運びます」
「レイ、貴方は良いけど、彼等はダメよ。病院だから服装は気をつ
けないと」
「すみません。御手を煩わせます」
ストレッチャーに少女達を乗せて病院内に入る。
真っ白い無機質な廊下を進み、第一処置室と言う部屋に少女達を乗
せたストレッチャーが入っていく。
「レイ、出すの手伝って！」
リズがレイに指示を出す。ジェニーはブロンズの髪を肩まで伸ばし、
ウェーブを靡かせている。
鼻筋が伸び、切れ長で彫りの深い顔は洋画に出てくる女優のような
白人系美女
リズはヒスパニック系だが金色の髪が褐色の肌に似合っていた
クリッとした目が特徴的な美女
どちらも正規な看護師だが、見た目はコスプレをした外人のようで
日本の病院には似つかない。
横須賀港近くの組織運営病院はインバウンドで来日する外国人専用
のクリニックであり、そこで働く看護師も大多数が外国人である。
袋から一人ずつ、出していく。
先ずはリサ。ジャケットを脱がし、スカートをずらすと下着のみに
して、分娩台のような診察台に乗せた。
両脚と両手首を台に固定した。

次にリカも下着姿で固定する。
ユミのバックを開けたリズは裸のユミを見て「レイ、遊んでない？」
「漏らしたので全て脱がせてあります。」
「そう。貴方の言う事だから信じるわ」
「もうすぐ、ドクターが来るから」
リズとジェニーはハサミを持ってリカ、リサの下着を切りにかかった。
「ねえ！この子は遊んでそうね」
リズがリカの下着を見てジェニーに答えた。
リカは黒いブラに合わせたパンティ。
Tバックのパンティを履いている。
「最近の少女はマセテいるからね！」
リズがリカのブラの紐をハサミで切り、次にパンティのヒモを切った。
「この子は経験なさそうね。」
リサの白いブラとパンティを見てそう言い、ジェニーはブラの肩紐にハサミを滑らせて入れた。
ブラ紐は直ぐに切れ、パンティの横幅なパンツの布地を切った。
「この子から見るわ」
ジェニーの両手がリカピンク色をした亀裂の小さい秘部に近づく。
「この子のヴァギナ、とても綺麗だわ！これで処女ならランクゴールドよ！」
ジェニーはリカの肉ビラを指で開き、膣口にファイバースコープを差し込んだ。
リカはグッスリ眠り込んでいる。
「見かけによらず、処女よ！下着が大人びたから経験していると思ったのに」
リカの両手首に器用にゴールドのテープを巻いた。
恥骨の薄い陰毛を触り、満足げにしている。
「次はこの子をみるわ」

リズがリサの亀裂をマジマジと見てクリトリスの包皮、肉ビラを引っ張っている。
「少し大きいわ。オナニー好きなのかしら？」
「オナニーしても処女なら良いわ」
二人の看護師はやけに処女にこだわっている。
少し自己主張の強い肉ビラを指で開き膣口にファイバーを差し込んだ。
「あら！この子も残っているわ。処女よ！」
「すみません！ジェニーさん、リュウさんからの指示で渋谷の事務所に帰ります。」
「なんか、あったのレイ！」
「なんか、事務所にアホが押し掛けて。対応に帰ります。リュウさんが後から来ますのでドクターによろしくお伝え下さい。」
「わかったわ！レイ」
レイは診察室から出ていった。

第二章　ユミの受難
ユミは薄ぼんやり意識が戻ってきていた。
看護師姿を見て安堵したが、手足を拘束されて分娩台の様な物に固定されている。
あ！拉致されたと思った。
拉致と思ったら急に震えてきた。
「あら！この子、起きているわ。」
「へー、騒がなければ痛い事はしないわよ。」
顔の先に近づけたファイバースコープの先が青白くスパークし火花を散らす。
スコープの先にはスタンガン機能が付いている。
アレがアソコの中で放電したら、そう思うと怖くなり剥き出しの尿道口が膨らみチョロチョロと漏らした。
「ちょっとジェニー！脅し過ぎ！又、漏らしたわよ」

「冗談よ！商品に傷は付けないわ。」
そっとガーゼでピンク色の尿道口から膣口、クリトリス、肉ビラを拭った。
柔らかい手の動かし方と同性に自分の秘所を弄られている恥ずかしさで、ユミは吐息を漏らして身悶える。
「この子、感じているわよ！リズ！」
「ジェニー！仕事よ！ちゃんとして！」
「はーい。」
子供のように返事をしてジェニーはユミの肉ビラを指で開き、ファイバーを膣口に挿入した。
「あら、この子、経験しているわよ。」
「へー。一番幼い顔をしていたから処女と思ったわ。ここもこんな感じだし」
リズがファイバーのカメラを覗きながらユミの短い陰毛を引っ張った。
「ゴールドの子は確定だけど後の二人はドクターにランク付けて貰った方が良いわね。」
これからどうなるのか？ユミは心配した。
まさか拉致されて、外国人に裸を見られているとは昼に三人でフラペチーノを飲んでダベッてた時からは想像もつかない。
処女は先輩の彼氏に強姦され失った。
処置室の引き戸が開き、長身の黒髪の女性が入って来た。
肩下まである真っ黒なストレートヘアの三十代の女性である。
眉毛が薄く整えられ、切れ長の目が印象的なパリコレモデルでも通用する東洋美人が白衣を着ている。
流暢な英語で看護師と話をしている。
ユミが起きているのをリズから聞いて敢えて英語なのか、英語しか喋れないのか拘束されているユミには分からない。
リサを指差し
「シルバー！」

「ブロンズ」
「ＯＯＯクリトリスアンドラビアＯＯＯ」
ユミの頭では自分の事をブロンズ。
そしてクリトリスしかわからなかった。
そして看護師二人に指示を出し処置室から出ていった。
先にリカをストレッチャーに乗せて出て行き次にリサが出ていった。
一人残されたユミはこれから何をされるのか分からない恐怖と性器に何かされるであろう事が交じり変な興奮をしていた。
リズが機械を引きながら処置室に入って来た。
「これから貴方のココを改造するから。麻酔は使わないから我慢してよね。明日には快楽に変わっていくから。」
そう言いながら、筒を右手に持ち左手で器用にユミのクリトリスの包皮を剥いた。
「ウゥン。アァアァン」
ユミは喘ぎ声を漏らした。
小さな剥き出しの肉の芽に筒が被せられ、筒が繋がった機械にスイッチが入る。
「シューシューシューゴー！」
コンプレッサーが作動する。
「ギューィーン」
管に繋がったゴムホースがピンと伸びた。
真空の筒は、肉の芽は強引に引っ張る。
「ウゥウゥアーアー痛いー」
肉の芽は真空になった筒の中で伸びていく。
「イヤー痛い痛い痛い」
１０分ほどで０．５センチのクリトリスは１．２センチに伸びていた。
すかさず、リズが医療用の輪ゴムを巻き固定する。
産毛の恥骨の下からピョコッと茶色の小さなミニペニスが生えている。

次に少し濡れた、ヴァギナにバイブが挿入された。
ユミは痺れているクリトリスに気を奪われて、挿入された事に気づいていない。
ジェニーが注射器を持ってユミの横に立つ。ユミの肉ビラを指で摘んで引っ張り、伸びた肉ビラに注射針を刺す。
中身はヒアルロンと蜂毒などを混ぜた肉ビラを肥大させる作用が有る液体。
左右の肉ビラに刺して、挿入したバイブを拡大させる。
バイブに空気が入り膣口一杯に拡張する。
「アァン！きつい！きつい！きつい」
極限迄広げてバイブを前後に作動させる。
膣内を刺激させる作用は無く膣口、小陰唇の肉ビラを伸ばす為の機械。
「今日は眠れないわね。又、明日に計測するから」
リズとジェニーは出ていった。
処置室に一人残されたユミはクリトリスを伸ばされ固定され、股間にはバイブを入れられて肉ビラを強引に伸ばされている。
ガクガクガクッと機械音を聞きながらユミの意識は遠のいた。
翌朝もボンヤリした意識の中、股間で作業をしているリズの姿が見えた。
クリトリスのゴムが外されて、医療用ノギスでクリトリスの長さを測る。
「今で9ミリね。後少しね。今日は昨日よりひっぱるわ」
クリトリスに筒が被された時にユミが叫んだ。
「もう！痛いの嫌だ！ここで死ぬ！」
すかさず口に猿轡がはめられる　。
「もう、うるさいこね！お仕置き。昨日より伸ばすからね」
「ギューンシューシューシューゴーゴーゴー」
真空の筒、内部が昨夜よりも強く吸引さる。
「ウゥアーアーアーアー」

猿轡を噛みしめて、耐えている額には脂汗が、滲む。
眼はギュと閉めて眉間にシワがよる。
敏感な肉の芽がちぎれる痛みが頭まで貫く。
２０分ほどで筒を外し、サイズを測る。
「１．８ミリね。今日はこれぐらいかな。」
手早く伸びたクリトリスにゴムを巻いていく。
ユミは白い目を剥き、ヒクヒクと痙攣していた。
股間のバイブを一旦、止めて肉ビラのサイズを測る。
「厚み２ミリ。長さは２．５センチ。もう少しね。」
「ウゥーウゥー」
気絶したままユミが蠢く。
肉ビラに、注射針を刺し、液を注入する。
又、バイブを挿入し機械のスイッチを入れた。
４日目にリズが医療用ノギスを持ち処置室に入って来る。
腕には点滴で栄養を補給され、拘束台の下に糞便は垂れ流し、リズが朝夕に肉ビラに注射を刺すときに性器は消毒液で洗浄される。
ユミは声を上げる気力も無くなっていた。
先にクリトリスを測り
「２．５センチ、これ以上はもう無理ね。」
片方ずつ肉ビラを計る。
「ビラは厚み８ミリ、長さ３．５センチ何とか合格ね。」
「見てみなさい」
大型の姿鏡に自分の性器が映された。
足を広げた股間には肉の蝶が羽根を広げ蝶の頭の部分に垂れた肉の塊が付いている
幼い顔立ちとグロテスクで不気味な肉の蝶が妙にエロさを際立たせている。
リズがカメラを持ってきて撮影を始める。
カシャ！カシャ！
顔、全身、バスト、性器のアップを撮り

「今日からは違う部屋だから。歩ける？」
ユミは首を横に振った。
処置室のロッカーからガウンを出し全裸のユミに着せて車椅子に乗せて、処置室を出た。拉致されて何日経ったのかわからなかった。
リサやリカもどうなったか分からない。
私のように性器改造されたのか？でも余り考えたくなかった。
リカが眼を覚ましたのは１０畳程の部屋だった。
拘束はされず部屋にはモニターとガラスで囲われたバスとトイレが部屋に付いている。
窓は無く、入り口ドアの横に小窓が有り、そこから食事が入れられる。
目が覚めて直ぐにリズに全身の写真を撮られた。
顔、バスト、股間を広げ性器。
白いガウンを渡され、裸の上にガウン一枚羽織った状態で監禁されている。
自分を拉致した組織に付いて考えたが病院規模が余りに大掛かりで、日本の組織では無い海外の組織と言う事しか分からない。
最悪な組織のドラッグを盗んだ。
その事だけは分かった。
何処か外国に売られる。
　その事だけは確かな事、最悪な展開になった。
リサもリカと同じ様な作りの部屋に監禁されている。
部屋に付いているカメラに向かい
「お金を払うから帰してください」と哀願したが返事は無い。
リズにも哀願するが英語で返答するのみ。
何も考えず、モニターに流れる音楽や映画をぼんやり観る日常だった。
ユミは毎日、自分の性器をいじっていた。
グロテスクに伸びたクリトリス
肉ビラは蝶の羽根のように肥大していた。リズが笑いながらバイブ

を持って来た。
「好きなだけオナニーしなさい。今は自由だから」
食事以外は性器を無意識にいじっていた。
第二章　ミツオとナツコ
「早く詰めろよ！何してんだ！買えるだろそんなの」
新宿のマンションの１室、スーツ姿のミツオと金髪の髪を後ろで縛り黒い上下のスエット姿の女の子が罵りあっていた。
「お前、捕まったら、殺されるよ」
「アンタのチョンボでしょ！アタシ関係ない」
「そんな事、考える組織じゃ、無いって」
「アタシのパパに言えばいいじゃん。渋谷ＯＯ会だよ。その上は関東ＯＯ会、なんだからね！大丈夫だよ」
「そんな組織よりデカいんだよ！」
「パパに聞いて見る」
ドカンッとマンションの扉が吹き飛び
大柄なガイの巨躯がサッとナツコに近づき口を塞いだ。
続いてジムが入ってくる。
「ミツオ！リュウさんが、呼んでいる、大人しく来る？」
組織のナンバーワンクラスの暴力装置が自分を捕まえに来た。
「大人しくすれば何もしないよ。」
ミツオは大人しく部屋から出た。
ナツコは猿轡をされても暴れている。
「このまま殺そうか？　」
凄い力で首を締められ大人しくなった。
廊下にかつての、グループの下端が笑いながら見ている。
「部屋の掃除宜しくね」
ガイがそう言うとナツコに馬のかぶり物を被せて出ていった。
ガイもジムも元傭兵である。
根っからの暴力と女好きで、ゲリラを虐殺して、女を暴行し過ぎたのを上官に咎められるが、上官を殺害して逃亡した。

一時は南米のギャング組織の用心棒だったがボスの女を暴行しギャングに追われる。
東南アジアのクラブの用心棒だった時にリュウと出会い組織に入った。
リュウは二人の性格を見抜き、加入条件として腹部に爆弾を仕込んだ。
ジムもガイも女をあてがっていれば大人しい
いい関係を今は築けている。
大型ジープの運転席にナツコを乗せて運転はジム。
後部座席にガイとリュウが座った。
ミツオは後部のトランクに入れられる。
ジープは大柄な黒人2人と馬のかぶり物をかぶったナツコ。
ナツコは助手席でまだ暴れている。
ズボっと、ナツコのスエットのパンツにジムのグローブのような手が滑り込む。
　パンティの中まで手は滑り込みナツコの肉ビラとクリトリスを捏ねる。
一層、ナツコは暴れたがジムの指先に力が入る。
肉ビラを摘んで引っ張った。
「痛い！ちぎれる」
「このまま引きちぎるか？」
ナツコは大人しくなった。
左手でナツコを弄りながらジープは横須賀の病院に入って行った。
かぶり物を被されたままナツコは処置室に連れて行かれ、ミツオも処置室に入って行った。
中にはリュウとジェニー、そしてドクターがいた。
ジェニーにパンティごとスエットをずり下ろされ、上のスエットも脱がされた。
そのまま、分娩台の様な台に乗せられ手足を固定された。
固定されたナツコの馬のかぶり物が取られる。

ナツコの前に白衣の女医。
ブロンズ色の髪色の看護師。
そしてレスラーのような黒人が立っている。
ナツコは金髪を後ろで結って眉は糸のように細く上方に伸びている。
バストは自称Fカップ。細身の体に似合わない大きなバスト。へそにはピアスを付けている
田舎のコンビニ前に、たむろしているヤンキー風な容姿。
目は、キッとジェニーを睨んでいる。
猿轡を噛みしめている。
「暴れ無ければ口は外して上げるけど？どうする？」
ナツコは頷いた。ジェニーが猿轡を解いた。
「ペッ」
ジェニーに唾を吐いた。
その瞬間、ナツコの首筋に閃光が走った。
ドカンと跳ねて、力が抜ける。
眼はグルンと白眼を剥き、口からは泡が出ている。
「ジム、電流強くないそれ。」
「あまり使わないから電撃は弱いよ。あれ、成人男子用だ」
無邪気に白い歯を出して笑っている。
恥丘の下から勢いよく放尿している。
「ヤだ！漏らした」
ジェニーが雑巾で無造作に陰部を拭き取る。
唾を吐かれたのが根にあるのだろう。
無造作に拭き取る。
ツーンとジェニーの鼻腔に変な臭いがした。
雑巾で拭いたから臭いがしたのか？
臭いの出元はナツコの陰部からする臭い！
「ドクター！この子、性病があるかも知れないわ。」
「ジェニー、血液検査して。この男も」
気絶しているナツコから採血をして、次にミツオから採血をした。

「ドクター！今日の女三人と昨日、捕まえたセクシー女優にオマケの女の５人でクスリの件は何とかなりませんか？」
「リュウ、この漏らした女とオマケの女でキャットファイトの動画をとって！漏らした女が性病なら犬の相手をさせるわ。」
「わかりました。」
ナツコはストレッチャーに乗せられジムが運んで出た
第三章　女優とメイクの災難
温泉街の外れに有る、寂れたホテルまでミチルは逃げて来た。
元はグループアイドルの選抜メンバー。
グループの仲間に誘われて、ミツオ達のグループと知り合い、クスリを勧められ、手を出し虜に成った。
ミツオ達は隠しカメラで、薬物パーティーを写し、写真を事務所に送って、揺する。
　一度は写真を事務所が買い取ったが、ミツオの下端が警察に捕まり芋ズル式にミチルも捕まった。
当時は現役アイドルの逮捕と言う事で大々的に報道された。
グループを解雇され、初犯で執行猶予が付いたが芸能界からは弾き出された。
アイドル事務所系列のセクシー女優専門の所に移り単体女優としてデビューした。
デビュー当時は元アイドルと言う事で売れっ子になった。
売れて来るとミツオ達が又、近づいて来た。その中のシンジはミチルも知っているアイドルだった。
シンジに夢中になって、シンジの知り合いのジローがやっているホストクラブに入り浸った。
ホストクラブは元アイドルやアイドルの卵、役者の卵が副業でやっているので渋谷では有名な店。
セクシー女優になった当時はイベントやサイン会と売れてきた。
セクシー女優のグループに入ってテレビ出演などアイドルグループ当時よりも売れたが一年経つと人気に陰りが出始める。

どうしてもオタクの汗ばんだ顔と握手には乗り気に慣れない。
同じようなチビでデブ、薄い髪にアニメTシャツ、アイドル時代も握手会は嫌で休んだ。
ファンにも嫌な顔がわかるようで次第に売れなくなった。
単体女優から企画物に移行するとセクシー女優グループからは外され、テレビ露出も少なくなり収入も減ってきた。
鬱憤をはらすかのようにシンジのホストクラブに行き、ドラッグにも手を染めた。
ツケ飲みをしだすと借金も増えて、女優業もNGを外しSMなどにも出演しだす。
ストリップにも出演しだしたが人気に翳りは出てくる。
借金が膨れシンジに相談するとレイと言う男を紹介された。
麻布に有るカフェでシンジと待ち合わせしていると、外に高級外車が停車して、レイが降りてきた。
レイは高級感あるスーツ姿でシンジには無い大人の男性のフェロモンがある。
眼の奥の暗さがミチルにとっては魅力的だった。
「シンジから話は聞いているよ。今もセクシー女優は、している？辞めずに系列の風俗で働いてくれるならお金は貸すよ。どうする？」
「お願いします。」
「後、ドラッグやっているなら辞めてよね。病気に罹りやすいから。其れが約束。出来るならシンジと契約して」
「シンジ！後は任せていい？」
後ろ姿もエリートサラリーマン然している。
「じゃあ、写真撮るから。スタジオに行くよ。」
渋谷のビルにスタジオはあった。
本格的なスタジオでカメラマン、スタイリスト、メイクは全て揃えていた。
「じゃあコレから。」

最初に渡されたのはグループアイドル時代のコスチュームだった。
制服のようなコスチュームに着替え、メイクやヘアも整えられて写真撮影が始まり、次に全裸になるように指示された。
スタジオでの全裸撮影は抵抗が有った。
セクシーＤＶＤ撮影は男ばかりだったので慣れてきていたが、メイクやスタイリストは同性である。
ライトに照らされ全身、バスト、顔、そして性器を広げての撮影。
アイドル時代のツインテールの髪形に少し垂れた眉毛と大きな瞳に腫れぼったい唇。
困った感じの顔とＤカップ有るバストがファンに支持されて人気だった。
十代から二十代に成り、成熟された雰囲気を全身から醸し出し、エロい。
シンジは店の売れっ子になると思っていた。
シンジにマンションの引っ越しを言われ、マンションを引き払って店の借りているマンションに移り、事務所もシンジの知り合いの事務所に移った。
ミチルの所属した店は大々的に元アイドルが所属する店として繁盛し、ミチルも毎日、８人は相手をした。
　８人の相手でミチルに手渡される日当は１万。
月に撮影しているセクシーＤＶＤ出演料は一本が一万。
食費で収入は無くなった。
毎日、店に来る客はオタクばかり、ホストクラブにも行けない。
ある日、オタクの常連客から金を借りて店から逃げた。
キモオタが嫌でホストに走り、アイドルをクビ。
握手が嫌でセクシー女優から風俗になり今は嫌いなオタクのモノを舐めて生活している。
借金返済まで何年か・・気がおかしくなる。
捕まっても殺される事は無い。
絶対に逃げる！

電車を乗り継ぎ熱海まで、逃げた。
後は九州の片田舎で、水商売で生活しようと考えていた。

ホテルに荷物を置き、夜になって食事にホテルから出た。
駅前はもしものことが有ると考え国道沿いのファーストフード店迄
夜間の道を歩いた。
「すみませんー。道を教えてください」
メガネを掛けた２０代前半の女が声を掛けて来た。
黒縁メガネに髪は後ろで無造作に結び付け、白いトレーナーにジー
パン姿。
明らかに学生か地元の女に見える。
スマホの地図をみせて来た。
「すみません。私もこの辺りははじめてぃ」全てを言う間に後ろか
ら口を押さえられた。
口を押さえているのはミツオ達だった。
「ジュン！よくやったよ。俺たちが声かけて、拉致ったら通報もん
だし」
ミツオの下のタケシがジュンの頭を撫でた。
ジュンはタケシの数いる女の一人でメイク見習いをしている。
直ぐにケンが車を回した。
グレーのワンボックスタイプ。
建築関係者がよく使っているタイプの車体。
ちがうのは、運転席以外はスモークを張っているのと、簡単にナン
バーが変えられる事
ミツオ達はミチルを後ろ手に縛り付け猿轡をかまし、車に押し込め
た。
「逃げられたら面倒だから。」
着ているブラウスをナイフで破って下着姿にした。
持っていたバックからホテルのキーを見つけて、ホテルの駐車場ま
で車を走らせる。

駐車場でジュンを下ろし
「ホテルで清算して、部屋から荷物を持って来て！ジュン頼むな！」
ジュンはホテルのフロントに行き部屋番号を言い、ミチルが、用事があって東京に帰った事を告げる。
フロントはジュンの素朴な感じの話し方や雰囲気を信じて清算を済ましミチルの部屋に案内した
部屋には中型のアタッシュケースが一つ有り、ジュンはそれを押してホテルを後にした。
車の後部ドアを開けトランクを乗せ、ジュンも車に乗り込む。
「ジュン！ありがとう」
タケシがそう言うとジュンの頬が赤らみ恥じらう。
「ミチル！レイさんからのメッセージ。
逃亡したから店はクビ。
借金全額返還か海外配信の動画を撮って、沖縄の置屋に売る。
海外配信だからモザイクなし。拷問ＳＭも撮影。」

そう言っているミツオの股間は膨らんでいる。
拷問ＳＭ、プレイと言うより拷問に近い。
一度プレイを見たことが有るが泣き叫びながら気が変になっていく女を見てイッタ事を思い出し勃起した。
早く、ミチルが壊れる所がみたい。
ミツオはそれだけを思いながらミチルの胸を揉みしだく。
「お金を返すか、撮影か決めて！」
ギュッと胸を揉まれミチルは暴れて出した。
車の中で暴れてられると事故をする。
ミツオはミチルの頬を2．3発叩いた。
ミチルは鼻血を出し、頬は赤くなった。
「どっち」
ミチルは「撮影」と小さく呟いた。
夜の高速を走り、渋谷のスタジオの入っているビルの駐車場に車を

止めた。
「ポンボロボン・・・・・」
ミツオのスマホが、鳴り出した。
「ミツオ！その女の子、売れたから手を出すなよ！傷もつけるな！
今からガイとジムが引き取りに行くからな。
場所は？渋谷のスタジオ？わかった！」
レイから連絡が入った。
取り敢えず、スタジオで待とうとミチルを連れてスタジオの有る階
まで上がる事にした。
「ジュン！なんか食べる物と飲み物！近くにコンビニあるだろう。
買ってきて」
タケシに言われジュンはコンビニへと出かけた。
「タケシ！ケン！この女、引き取りに来るまで輪姦さねー」
「タケシからしろよ！」
タケシがミチルのブラを強引に引きちぎった。
ミチルは暴れて抵抗したがケンに腕を押さえられて身動きが取れな
い。
タケシは急いでシャツ、ジーンズを脱ぎ、脚を開いた途端に
ドン！とスタジオの扉が開いた。
ガイとジムが立っていた。
「何をするの？レイから連絡は無かったか？女、殴った？」
足早にタケシに近寄ると「ガスッ」といきり勃起し挿入前の状態に
ある全裸のタケシの顔にジムの回し蹴りがまともにヒットした。
タケシの首が後ろに廻っている。
首が折れたタケシは吹っ飛び、勃起したまま絶命した。
目の前のタケシが蹴り飛ばされたのを見ていたケンは手を離し、ミ
ツオの側に駆け寄り震えている。
震えながらミツオがジムに近づく
「ジムさんやりすぎです」よ。を言う間にジムの張り手がミツオを
吹っ飛ばす。

ミツオは転がり白眼を見せて気絶している。
ズボンが徐々に変色していく。
「これ、ミツオが起きたら渡せ。後、レイに連絡して、ここの掃除」
ケンにそう言ってミニアタッシュケースを投げた。
ミチルはタケシ殺害の惨劇とレスラーのような体躯のジム、ガイを見て気絶した。
「ガチャ！」
ジュンが買い物から帰りドアを開けた。
タケシの全裸で絶命した姿と大柄な黒人、伸びたミツオ。
気が遠く成りその場で腰が抜けた。
「オーおみやげね！」
ヘタった、ジュンを肩に抱えてドアを開けガイは出て行く。
気絶しているミチルはジムが抱え上げてスタジオのカーテンを引きちぎり、裸のミチルを包んだ。

そのまま荷物のように肩に抱えて出て行く。
残されたケンは気絶しているミツオ、絶命しているタケシを見て絶句している。
ミツオのスマホが鳴った。レイからの着信だった。
「ジムから聞いた。ケン、掃除屋を回すからお前はいろよ。」
程なく掃除屋がグレーの服を着て入って来た
「あの」とケンが、側に寄るなり注射器をだし、腕に注射器を刺した。
ストンとケンは気絶した。
気絶したケンをそのままに掃除屋はタケシの遺体を袋に詰めて手押し台車のごみ入れに放り込んだ。
ジムが引き破ったカーテンを全て変えタケシが流した体液を拭き取りケンをゴミ入れに放り込みスタジオから出て行った。
残されたのはミニアタッシュケースと伸びているミツオだけになった。

第四章ユミの誤算とミツオの悪夢

「ポンボロボン！ポンボロボン！ポンボロボン」
昼過ぎにスマホが鳴った。
ふらふらと起きたミツオが電話に出ると。
「おい！ミツオか！お前は生かすから、いつものように仕事はしろよ！今日の夜８時にアタッシュケースの物を取り引きしろよ。」
レイからの着信だった。
「わかりました。」
電話を切り、タケシやケンがいないのに気づいた。
タケシやられたな。
まぁ兵隊は、いるしな。
パンツのゴワゴワした、漏らしたのが気になりナツコに電話をした。

「ナツコ！何でもいいから、着るものを買ってスタジオまで来てくれ！何でもいいから！」
ナツコはブツブツといっていたが、一時間後にスーツと下着を買って来た。
リクルートスーツだったが文句を言っても疲れると素直に着替え、ミニアタッシュケースを持ってスタジオを後にする。
ナツコの軽四に乗って中野に行くように指示した。
「何？中野に何の用事なの？女？」
「違うよ。仕事だよ。文句言わず行けよ！」
中野駅前のロータリーでミツオは車を降りた。
約束時間までまだ、４時間ある。時計を眺めていると、スマホに着信があった。
出会い系のアプリに１と、有る。アプリを開けるとユミと言う少女から返事が入っている。
昨夜の事から憂さ晴らしに、この子をいたぶるのも良いなと思い、

返事を返した。
「ハンバーガー奢って！」
「今どこなの」
「中野」
「近いね。中野駅前に、来る？奢って、あげるよ」
「すぐいく！目印なに？」
「黒のミニアタッシュケースとスーツ姿」「わかった」
「名前は？」
「あたしはユミ、貴方は？」
「俺はタカシ」
直ぐに待ち合わせ場所に行った。
直ぐに童顔に大きめのニットの少女が寄って来た。
「タカシさん」
「おう！ユミさん？」
ミツオのリクルート姿にサラリーマンと思いユミは安心する。
レイさんのようにスーツも女の子が警戒しないから、俺もスーツにするかとミツオは思った。
出会い系アプリに乗せている顔は加工してわかりにくい。ホテル迄きたら。仲間を呼んで遊べば良い。
ブスならハンバーガーで返せば良い。
ミツオはそう思っていた。
ユミも、いつものリーマンがカモになったと喜ぶ。
駅前から外れた所のハンバーガーショップに入る。
夕方なので学生や仕事帰りの会社員で混んでいた。
「なぁテイクアウトしてどこか入る？」
「良いよ！」
バーガーを買って二人は店から出た。
駅の外れに有るラブホテルに二人して入った。
「アタシ、初めて入る！田舎には無い！」
ミツオはスーツの上着を脱ぎ、風呂場に向かった。

昨日からシャワーも浴びていない。
殴られて失禁した下半身も洗いたい、そんな思いから
「俺、風呂に入るから先に、食って！」　ユミの童顔に
気が緩み風呂場に向かった。
ヤリィ！自分から入った！
ユミはそっとミニアタッシュケースを開けようとしたが鍵が付いている。
そのまま、ミニアタッシュを持って部屋を出た。
風呂場から出るとミニアタッシュとユミがいない。
餓鬼にやられた！今度こそ消される。
慌てて服を着てシンジに連絡を入れた。
「シンジ！俺、ミツオ！黒のミニアタッシュを盗られた！レイさんからの仕事の商品だよ。グループの仲間全員で探してくれ！」「ミツオさん、レイさんに連絡は入れたのですか？直ぐにして下さいよ！ミニアタッシュは探します。で、どんな奴が盗んだ？」
「子供みたいな童顔に大きめニット来た２０代か１０代」
「わかりました。絶対にレイさんに連絡してください」
溜息を吐きながらシンジはアレがリーダーかと嘆いた。
奴の性格からして、俺に責任を回す。直ぐにレイに連絡を入れた。
「レイさん。シンジです。ミツオの奴、ナンパした女にレイさんからのミニアタッシュを盗まれて。」
事の次第を聞き
「シンジ！ミニアタッシュにスマホを入れているからＧＰＳで追ってくれ！アイツの性格からして高飛びしそうだから俺はミツオを拘束する。泥棒猫を見つけたら連絡を入れろ！
上手くいけばシンジをリーダーにするからな！」
レイはシンジとの連絡を切り、リュウに直ぐに連絡をした。
事の次第を聞き
「俺とジム、ガイで行くからアイツに埋め込んだＧＰＳで場所を確定して逃げるの阻止してくれ！直ぐに行く！」

「ジム！ガイ！ハンティングに行くぞ！」「オー狩りね、楽しみね！」

ジムの運転するジープに乗りミツオに付いているＧＰＳを追跡する為、カーナビの設定を変えた。

新宿区のマンションで止まっている。

「おい！近くの奴、逃すなよ！」

マンションの近くに停車し、ジムとガイがマンションに向かう。

程なく馬のかぶり物をした女を肩に担ぎジムとガイはマンションから出てきた。

ミツオも素直について来ている。

リュウは後部座席で座っている。

ミツオをトランクに投げ込み、ガイが馬の頭の女を助手席に乗せた。

「ガイ！何これ？」

「ミツオと一緒に居たから持ってきた。おみやげね」

ジムも乗り込んだ。

「ドクターの病院に行ってくれ」

鼻歌を歌いながらガイは運転を始める。

「事故はやめてくれよ！」

「まかせてよ」

ジープは高速道路を横須賀に向けて走り出した。

第五章　キャットファイト

何故、自分がさらわれたか分からない。

今、全裸で両腕は天井からの荒縄に縛られて吊るされている。

股間に鉄のフックが前と背後の穴に突き刺さる。

フックに付いたロープは天井の滑車に伸びる。

フックがアナルと膣口に刺さり、上に引っ張っている為、爪先立ちしないと体重が二つの穴にかかり激痛が走る。

吊るされた部屋の床はタイル張りでステンレス製テーブル、鉄のサボテン、三角の山。

隅の方で男がドリルを点検していた。ドリル部分にはイボの付いた張型。
ジュンは黒人に連れ拐われた事は分かったが気が付いたら、病院のような所で外国人の看護師に性器を調べられ採血をされた。
口とには猿轡、目にはガーゼの目隠し。
薄い目隠しから外国人なのは分かった。
色々と話していたが何語かは分からなかった。
拘束を外され、作業着の男に連れられ部屋に入った所で何かを嗅がされ気絶した。

起きた時に股間に激痛を感じ吊るされた事を知った。
「ギャーン！」
作業着の男はハンドチェーンソーを持って動作確認をしている。
アレでバラバラにされ殺されるのか？そう思うと怒りが湧いて男をずっと睨んでいた。
「ピコーン！ピコーン！ピコーン！」
部屋の四方のパトランプがまわっている。
作業中でも着信が分かるように取り付けてある。
三十代のメガネを掛けた学者風な中肉中背の男がメガネを外し部屋の隅の受話器を取った。
「はい。タクです。え？中止ですか？キャットファイトの撮影？わかりました。連れて行きます。」
ニコニコしながら、吊るされたジュンに近づいて
「良かったね！もう少しは、大丈夫。もしかしたら開放されるかも？」
そう言いながらジュンの身体の横に垂れ下がっている縄を緩める。
股間の激痛が次第に無くなっていく。
膣口に刺さったフックは直ぐに外れたが、アナルのフックは強引に外され少し出血している。
先に首に犬用のリードをつけられて、手錠をかけられた。

手首の縄を外し男に犬のように連れられ部屋を出る。
「今から喧嘩?違うな殺し合いして貰うから。相手も殺す気で来るからね。ガンバッテ」
体育館のような扉を男が開けた。
廊下は病院の廊下の作りなのに、扉を開けた先は金網のリングが有る。
中には先に金髪の女とレスラーのような黒人が立っている。
女は金髪だが日本人のようだ。
どこかで見た事が有る。ミツオの彼女だ!
ミツオの為にタカシが殺された。沸沸と怒りが湧いてきた。
「先にモニターを見て貰う!」男の声と同時にリング上のモニターに映像が流れた。
ブロンドの眉毛と眉間のシワから見えてくる。
外国人の女が猿轡をされ、眼を瞑っている。
肩に獣の手が置かれている。ブロンドの髪を乱している
女の頭の上で口に覆面を被せた犬が頭を上下している。全体像が見えて来た。
女が四つん這いになり、肩に手を置いて犬が腰を振っていた。
結合部にカメラが近づくとファギナを一杯に広げて動く度に肉ビラが伸びたり縮んだりしている。
肩についている犬の手からは爪が飛び出て女の肩を掴んで離さない。
突かれる度に女の恥骨の上がボコボコと脈打つ。
「ガァガァガウ」
犬が射精したようだ。
飼育員が犬の首輪にリードを付けて女から強引に剥がした。
ズルンと膣口から犬のペニスが出てくる。
体液と血が混じった液体がドロッと落ちる。眉間にシワを寄せた顔から力が抜けている。身体の力が抜けて四つん這いにされた台の上でガクンと力を抜いている。
「次のが見応え有るから」

タクが喋って来た。次？何が有るのだろうか？犬にやられても死ぬ事は無い。
ジュンがモニターを見ていると茶色の体躯の獣が入って来た。
大型の豚！四つん這いの、女の尻の高さにスロープの台が置かれた。
豚が女の尻に鼻を伸ばしフゴフゴ、臭いを嗅いでいる。飼育員が豚をスロープに乗せていく。
豚の股間から長いドリル状のペニスが伸びて来る。
「豚のペニスは子宮口を貫いて、卵管まで伸びて射精するからドリル状のペニスを持ってるんだ。普通の豚のペニスなら柔らかいけど、あの豚のペニスは特製だからね。
見応え有るよー」
ごくりとジュンは唾を飲み込んだ。
タクは微笑みながらジュンの顔を見ている。この子はＭかと思ったがドがつくＳだわ。
キャットファイトの結果次第で、ウチで使えるな。
そう思いながら豚と人間の交尾を見ていた。
豚のペニスの先が、女の茶色がかったピンクの割れ目を突き刺す。
飼育員が豚の尻を押して補助をした。
閉じていた女の瞳が大きく開く。
普通に海外ドラマに出演して居てもおかしくない綺麗な顔をしている。
「モデルも豚と交尾をするようになるとはなぁ」
聞こえるようにタクが呟く。
「ガァー」
豚の叫びか女の叫びか分からない雄叫びがモニターから聞こえた。
豚の４０センチ有るペニスが半分くらい入った。
女が犬よりも痛がった。
首を振って嫌がっている。
飼育員が豚の尻をまだ押す。
「グォーグォーノー」女が叫びながら首を振る。

豚のペニスが全て女に収まる。
豚が腰を振り出す。
ヘソの辺りがボコボコボコ、犬よりも大きく動く。
女の尻の下辺りに血溜まりが出来る。
４０センチのドリルで子宮を貫く。
眉間のシワがとれてくる。
猿轡を噛みしめていた唇から力が抜ける。
薄く開いた目は白く、猿轡の唇からは血の泡が垂れ下がる。
「内臓、壊れたかな？」
タクが呟いた。
豚をスロープから下ろし飼育員は豚を二人掛かりで連れて行く。
別の男達が台に付けたまま女を連れ出す。
拍手と歓声がモニターから聞こえる。
「負けた方がこの女の役になる。
そしてショーに出演して貰う」
「勝負は特製バイブを相手の穴に入れてボタンを押すそれだけ。」
「後、時間制限でバイブは変形するからな。」
モニターには変形するバイブの形態が写される
モニターが画面の映像は早送りになる
１０分後、黒いバイブ本体の色々な所が膨らみ１センチ程のイボが出る。
２０分後、イボが尖り出しサボテンのような形に変形。
３０分後サボテンが回転する。
４０分後、黒いバイブ本体の色が赤く変色していく。
タクがテッシュをバイブに置くと一瞬で燃え上がる。
これ、相手の穴に突っ込んでボタン押さないと変形しないから。なるべく早く突っ込まないとお尻の穴ならウンコ出来ないよ」笑いながら説明している。
モニターが消えて、ジムとタクは、首輪のリードを外してバイブを渡すと金網から出た。

「カーン！」
鐘が鳴りナツコが怒鳴りながら近づいてくる
「お前！タケシの女だよな！私はミツオの女だよ！
わかるよな！大人しく入れさせな」
ミツオの女と言う金髪が命令口調で怒鳴る。
タケシの事を思い出し
怒りが沸沸と湧いたジュンがバイブをナツコの顔に振り下ろした。
バイブの柄の部分がナツコの鼻に当たる
「テメェ！ブスがぶっ殺す！」
よろけざまにナツコがジュンの腰にタックルをし、押し倒した。

マウント姿勢になったナツコはジュンの顔に拳を振り下ろす。
ジュンは顔を手でガードして、膝でナツコの尻を下から膝蹴りする。
尻を蹴られナツコが前のめりになる。
四つん這いになったナツコの腹がジュンの顔の前にある。
ヘソのピアスが揺れている。
手で握り締め、力一杯引いた。
「ブッ！」「グェ！」
ナツコがカエルの様に唸る
手には血がついたピアス、蹲るナツコに飛びかかり、押し倒す。
今度はジュンがナツコに跨り顔に拳を振り下ろす。
ナツコの右手がジュンの陰毛に伸びる。
手に握れる限りの陰毛を掴み、力一杯引き抜いた
「ブチブチブチ。」
ナツコの右手に、陰毛が握られている。
ジュンは余りの激痛にナツコから離れた。
強引に抜かれた恥丘からは血が滲んでいる。
二人とも髪の毛を振り乱し、ナツコは鼻血。ジュンのメガネは無くなり、ボヤッとしかナツコが見えない。

ナツコがジュンの乳首を掴み引っ張る。
乳首に激痛が走ったが、ジュンがナツコの股間に手を差し込み、茶褐色の裂け目に指を引っ掛けた。
余りの痛さに乳首から手が離される。
「１０分経過」
二人ともバイブが発熱するまでに決着をつけたい。
ナツコがジュンに飛びかかり、倒す。
胸に乗り、ジュンの右足を持ち上げて股間にバイブを振り下ろす。
「ウゥ」尻の穴を目指したが入らない。
ピンクの割れ目に押し当て、差し込んだ。
勝った！壊れろ！スイッチを押す。
「ウゥ」
ジュンが呟いたが股間に変化は何も無い。
金網にジムが入ってきて、ナツコを抑え付けた
「犬の相手はオマエだ」
「はぁ？私の方が勝ったけど？」
スピーカーからリュウの声が聞こえる。
「お前さぁ。性病が有るから売れないの？わかる？嫌ならそのバイブで焼くけど良い？」ズボッとパイブをナツコの膣にジムが差し込んだ。
「いや！今はいや」
「ジム！連れて行って」
ナツコは腰を退きながら嫌がったがジムに連れられて行く。
「タク！その子をジェシーの所につれていって！」
ジュンはタクにリードをつけられて金網から出て、病院の廊下を歩いている処置室に連れて行かれた。
「ジェシー！連れて来たよ。リュウさんからの話をして」
ジェシーは流暢な日本語で喋り出した。
「結論から言うわ。あたし達の仲間にならない？なるなら解放してあげる。リュウさんに聞いたわ。拷問部屋で叫ばずにタクを睨んで

いたって？
メガネを外すと綺麗だし、メイクの仕事をしているでしょう。私達の芸能事務所でメイクの仕事と組織の指示をこなして。どう」
ジュンは生き残れるならと頷いた。
「じゃあ、その台に乗って」
ジュンは自分から分娩台の様な拘束台に乗り脚を開いた。
「このままじゃ、クスリは塗れないわね。剃るわよ。」
剃刀でジュンの剛毛をすべて剃り上げた。
割れ目に指を当て、隅々まで陰毛を剃って行く。
「綺麗な色をしているわ。余り経験して無いでしょ。」
尿道口から膣口を触り肉ビラを触った。
顔を赤らめて恥ずかしがっているのをチラッと見てジェシーは笑った。
ちょっと待ってね。
クスコを持って来てジュンの肉ビラを指で広げて銀色のペリカンの口を差し込んだ。
クスコのネジを回すと膣口が開いていく

膣の奥に肉の山が見える。山の頂上に横に亀裂が入った穴が見える。
「ちょっと痛いわよ」
ジュンの下腹部、恥骨の奥辺りに鈍い痛みが走る。
「あ！」思わず声がでる。
子宮口に鉄のマドラー状の物を差し込み、ボタンを押した。
子宮内に何か入ったようだ。
「これでよしと！」
「何が入ったのですか？」
ジュンはジェシーに聞くと
「ＧＰＳよ。組織から逃げたら金髪の子みたいになるからね。」
拘束台から下され、

「明日、この住所に行って。メグって子にその紙を渡して。時間は厳守よ。其処のカゴに修理したメガネとブラウス、下着が入っているわ。バックには活動資金も有るからね。」
そう言い残しジェシーは出て行った。
子宮内に有る機械は気になったが下着を付けて、ブラウス姿になった時にタクが入って来た。
「もう、着替えた？これを着けて。」
マスクを付けタクに背中を押されて車に乗せられた。
一時間程、車に揺られ、品川駅前で下された。
「降りて２０数えてマスクをとってね。」
ジュンは素直に従った。マスクを取ると真夜中だった。
時計も無いので改札に行くと駅は閉まっている。ジュンは処置室で受け取ったバックを開けた。中には３０万円入っている。
タクシーを拾い自宅の最寄りの駅迄告げた。タクシーに、揺られ、少しだけ眠りにつく。「お客さん、着いたよ」
支払いを済ませて家路に着く。
マンションの鍵を開けて直ぐにベッドにうつ伏せになる。
いつの間にか深い眠りについていた。
翌日の昼前に起きると股間が疼き痛む。
ナツコに乱暴に扱われ傷が付いたのだろう。シャワーを浴びながら下半身の陰毛が剃られツルツルになった自分の下半身を撫でた。
昨日の出来事は夢じゃないと改めて思い出し、ジェシーからのメモを見た。
夜の１０時、渋谷区〇〇住所と電話番号が書かれていた。
電話番号に電話をすると女性が出た。
「はい！メグです。貴方は？あ！ジェシーから聞いているわ。時間下厳守で来てね。今の勤め先には退職する事を伝えて。待っているわね。」
一方的に電話を切られ、ジュンは勤め先の美容院に電話をいれ、退職を申し出た。

店の店長に止められたが、実家の都合と言う事で辞めた。
電話を切り、身支度をした。先に汗ばんだ体を洗いたかった。
湯船に浸かるとお湯が膣内に入り染みる。
湯上りのタオルを外し、ブラを付け、下着を履いた。少しチクチクとパンティと恥が擦れ妙な感覚がする。
何時ものジーンズを履き、Tシャツを着てその上からパーカーを羽織る
散々、タカシにバカにされたが一番、しっくりくる。
何時もの様に髪を後ろで束ね、予備のメガネを掛けて夕方、家を出た。
電車に乗り1時間で住所のビルに着いた。
20階建の10階。住所は合っているが目当ての階には業界大手のモデル事務所が入っている。
時間前に受付で名前を伝えた。
「のけ！こら！」
「ナツコ、おるんじゃろ！」
着物を来た白髪の男が二人、男を引き連れてガードマンの制止を振り切り、エレベーターに乗り込む。
ナツコ？あのナツコの関係者？いかにも、そのスジの男達がエレベーターに乗って行った。このビルってタカシに一度、教えられたグループのバーの裏にあるビルだ！
じゃあ今日行く事務所も関係先？余りに組織の規模に驚いた。
時間厳守だから、ジュンもエレベーターに乗り10階に登った。
「ジュンと言います。メグさんに呼ばれて来ました。」
「時間ピッタリね。メグです。入って。」
168センチの長身にパンツスーツをきた女性が入って来た。ボブカットの髪はグレー系に染めている。
胸はスーツに収まらない位大きい、胸の谷間がシャツから見える。
「これ、ジェシーさんから渡されたメモです。」
「ありがとう。合格ね。メモを紛失または、渡さなかったら、海外

配信の女優だったわ。」
「組織の仕事は言われた事を忠実にこなせるかなの。明日からヒトミってモデルのマネージャーに着いて。」
「今日はもういいわ。明日から出社して」「貴方もキャットファイトをしたらしいわね。」
「アタシもしたのよ。名誉の傷」
ブラウスをはだけて乳房をジュンに見せた。有るべき乳房の天辺に乳首が無かった。
「アタシは噛みちぎられたけど、相手の眼をくり抜いて勝ったわ。」
「二度としたくないなら失敗しないようにね。」
同じ１０階の別のフロアから怒号が聞こえる。
「ナツコと付き合っていた、ミツオをだせ！」
他の男達が観葉植物を倒す。
「お客さま。落ち着いてください。此方の応接間で話は伺います。」
１０階はレイが経営する金融屋が入っていた。
「おい！レイさん呼べ！その筋だわ。」
「もうすぐ弊社の代表が来ますから、お待ち下さい。」
２０分後にレイが入って来た。
「おい！お前とこのミツオ！だせ！ナツコと一緒だろ」「ウチも、困っているのです。急に金を持っていなくてなりまして。」
「ふざけたことぬかすな！
ドカン！テーブルを白髪の男が叩いた。
ガン！レイがテーブルを蹴る。
「お前のところのバカ娘が金を持って逃げんだろ！おまえ何処のものよ！」
レイの剣幕に男は怯み、
「俺は新宿ＯＯ会よ！」
レイは立ち上がり
「新宿ＯＯ会って、関東ＯＯ連合の枝だよな。」
「おい！ＯＯ連合の上田に連絡しろ」

レイの部下が携帯で電話を掛けた。
白髪の男は何故、上部団体の幹部を知っているのか不思議がった。
「あ！上田さん？レイさんに代わります」「上田さん、オタクの新宿ＯＯ会の来て脅してくれてんだけど、分かる？」
「ウチは喧嘩なら買うけど．どうするの？」「おっさんに変わるわ」
電話を白髪の男に投げた。
「俺が間に入って話をするがどうだ？」
「はい。幹部が話しをして貰えるなら。はい」
「車に戻って待機しろ」
「レイに変われ！」
レイが受話器を持ち怒鳴る
「いきなり、看板をひけらかして上田さん、ウチとするの？」
「嫌、やる気はない。どうにかならないか？」
更に語気を強め
「ウチは金を持ち逃げ、された！」
「娘だけ、１億」
「それ以外はむりだ！上田さんの願いでも聞けない」
「わかった。話をする」
路上に止まった、車の中で白髪の男の電話が鳴る。
「おう！相手は１億５千で手打ち！払えるか？」
「無理ならこれ以上は話しが無理だ！金の持ち逃げはウチらでも、無理だわ。戦争するなら、お前達でしろよ。ウチは関係ない。お前の所は破門にする。払うなら又、電話しろ」
白髪の男は運転席にいる男に「車を出せ」と呟き
車の座席に深く座り眼を瞑った。

第五章　ミチルの懐妊チャレンジ

ミチルが捕まって２日経った。
真っ白い部屋でモニターに映る映画やアニメ、音楽配信を観て過ご

した。
食事は毎食、時間に成れば小窓から入れられる。
いつまでこの部屋か？命は大丈夫そうだ。
少し安心したしていた。
「お嫁入りよ！」
リズが入って来た。首に首輪をつけられてリードが引かれる。
リズに引っ張られ処置室に入った。
「全部脱いで其の台に脚を広げて座って」
白い病院服を脱ぎ捨て、全裸になり台に脚を広げて座った。
リズの手にはクスコと卵に棒が付いたものを持っている。
「貴方、逃げ癖が有るからこれね」
クスコを膣口に差し込みネジを回した。
膣口が開きピンクの子宮口が見えてきた。
卵に棒が付いている。棒の先を子宮口に押し当て刺し込んだ。
ズキッと下腹に鈍痛が走る。カチと卵に付いた、スイッチを推すと
子宮内で傘が開いた。
タブレットを持って来たリズは動画をミチルに見せた。
動画には首輪をした鶏。
鶏をカゴに入れて、リモコンを持った男が離れた。
ボン！鶏が爆破する。
真っ黒な黒煙が上がり鶏は跡形もない。
「あれは5メートル離れたら爆破するの」
「貴方のコレは7メートル。試しに逃げてもいいわよ。」
隙を見て逃げようと思っていた事を見透かされた。
「其の服を着て。今から海外よ。貴方は大金持ちのご主人と結婚するの。赤ちゃんが生まれたら一生安泰よ。」
ミチルはリズに言われた服を来た。白の上下の下着。淡いピンク色のブラウスに白のカーディガン。
「やっぱり、貴方は清楚な服が似合うわ。」
廊下にガイが立っている。見上げるぐらいの大きさ。

リズからリモコンを受け取りミチルの背中を押して廊下を歩いていく。
玄関には黒いハイヤーが止まっている。
先にミチルを乗せてジムが乗り込む。
重厚なドアが閉まり車は走り出した。
港沿いに道路を走り高速に乗る。
外は暗闇で建物がどの辺りに有るかわからなかった。
黒いハイヤーは高速道路を降りて空港に向かう。
空港ターミナルに寄らず、プライベートジェット乗り場に車は着いた。
ジェットからタラップが降りてＣＡがタラップの横にたっている
ジムは笑いながらＣＡに声を掛けて爆弾のリモコンを渡した。アジア系の背の高いＣＡで有るが右目に皮製の眼帯をしてある。短く刈り上げた髪が美男子に見えるが胸も大きく、肩幅も有る。
「先に上がりなさい。」
促されミチルはタラップを登った。
ＣＡもタラップを上がり、ミチルの席に来て「スカートをめくりパンティを下ろしなさい。」
顔を紅くし、普段から困った眉毛がよけいに困った感じに見えてくる。
パンティをずり下ろし股を少し広げると、ＣＡの右手の指がピンクの割れ目を開き、左手で膣内を弄りだした。
「うっくっあぁ」
カチ、下腹部からスイッチ音がして、ズルんと、銀の卵が出てきた。
「あんっ」
ＣＡがミチルの肉の芽を指で弾いた。
「飛行機内で誤爆したらアタシ達も終わりだからね。パンティ履きなさい。」
あの卵は本当に爆弾だとミチルは震えがした。
ＣＡがインターホンで機長につたえる。

「準備は良いわ。」
ジェット機は滑走路に出て、滑走路を飛び立った。
眼下に東京のネオンが広がる。
ミチルはもう一度、帰国出来るか、心配になった。
座席に座ると急に眠気が起こり気絶したように眠った。目が覚めるとも眼下にジャングルが見える。
　場所がわからない。東南アジアか南米か鬱蒼と茂った樹々の中に滑走路が見えて来た。ゆっくりと飛行機は降りて行き、無事に着地した。
白いリムジンが止まっている。
リムジンの横に白衣の女性が立っていた。「無事に届けたわよ。」
白衣の女医に近づきＣＡがそう呟いた。
「ありがとう。」
そしてミチルに近づき
「貴方がミチル？今日から貴方は子供を作るのよ。子供が出来たら貴方、お金持ちよ。」
まだ、２０代半ばで子供？ミチルは気が進まなかったが、従うしか無かった。
「乗って！ヤン大老に合わせるわ。」
大老？爺様の相手をして子供を作る？
どんどん気が滅入ってくる
「ヤン大老を絶対に怒らさないでね。あたし達も止めるの無理だから。」
ジャングルの中の舗装された道路を走り、暫くすると白亜の建物が見えて来た。
ジャングルの緑を打ち消すような純白の建造物。
建物の地下駐車場に到着して、車から降りた。東南アジア系のメイドが出迎えている。
「すぐに浴室に連れて行き、夜の準備をして。それと食事。お願いね。」

ミチルはメイドに連れられ大浴場に連れて行かれた。
「こちらにお座り下さい。」
日本語が出来るメイドもいるようだ。背もたれの有るバスチェアーに座るとメイドが3人がかりで全身を洗う。
髪を洗うメイド。身体を洗うメイド。下半身を中心に洗うメイド。
メイドの泡立った手がミチルの股間を手で撫でながら念蜜に洗う。
シャワーで全て洗い流されて湯船に浸かる。
温泉の大浴場を独り占めしている気分になり、日本での出来事が夢のように思えた。
浴室から出ると着替えも全てメイドが手伝った。
シルクの下着に高級なガウン。
そのまま食堂に通され高級フレンチのコースが用意されていた。
コレでイケメンの主人ならこんなに良い生活は無いわ。段々とセレブ気分に慣れてきている。
食後、寝室に連れて行かれた。サイドテーブルにワインが置かれている。部屋の中には、世界中のアイドル歌手、女優の写真が飾っている。
だが、横に小さな男も写っていた
余り気にせず、ワインを飲む。
ガチャ！空港で出会った白衣の女医が入って来た。
「もうすぐ来るからね。絶対に粗相のないようにね。」
ガチャ！部屋のドアが開いて秋葉原にいる様なオタクが入って来た。
え？オタクの相手をするの？
日本にいた時と同じじゃないの！１６０ぐらいの身長に黒縁メガネ、チェックのシャツにジーンズ。
年は４０代ぐらいの中年男が、いた。
「わー！〇〇グループのミチルだ！本物だ」
ベッドのミチルに飛びついた。
「もう良いよ。また、呼ぶまで、出てて！」
女医が頭を下げて、部屋から出た。オタクがミチルのガウンを脱が

し、胸に顔を沈めた。乳首を口に含み噛んでくる。
「痛い。」
咄嗟に声が出た。
日本で風俗にいた時も乱暴な扱いはされた事が無い。
オタクがミチルの豊満な乳房を揉みながらキスを求めて来た。
眼を閉じたがオタクの分厚い唇とナメクジのような舌を思い出した。
「嫌！イヤー。」
強い力でオタクを突き飛ばした
　余りの勢いでオタクはベッドから転げ落ちた。顔を真赤に変色している。カベの受話器を取り
「・＊＊＊＊＊＊＊＊※」
何語か分からないが怒鳴っている。
バタン！ドアが開き女医とメイドが入って来た。
「こいつ要らない！何時もの人形に変えて！」
「わかりました。」
全裸に近い状態でミチルはメイドに連れられていった。
「バカね。あれだけ言ったのに。」
そのまま地下に連れて行かれた。地上階の華やかな内装の正反対のようなコンクリートの打ちっぱなしの部屋にＹ字型に開いた拘束台メイドに拘束台に縛られた。
人形って何？私、殺されるの？
「イヤー！助けて！許して！」
「うるさい子ね。」
口に医療用のマスクを被された。麻酔で直ぐに気絶した。１時間後ぐらいに再度ミチルは起きた。
ギリギリギリギリギリ！下半身から音がする。
何かを広げている様な機械音。
薄く眼を開けると股間に筒形刺さり筒に繋がった機械から音がしている。
下腹部の奥に鈍痛がする。

筒が二重になっており、外側が膣を広げて、中の筒が子宮口を広げている。
首をもたげるとコーラのペットボトルぐらいの大きさに筒が広がっている。
「イヤー！オOコが壊れちゃう！イヤ」
無理ヤリに広げられているが痛みが無い。
「起きた？腰から尻にかけて麻酔を打ったのよ。汚物は垂れ流しだけとね。」
女医が部屋の隅にいた。
「お願い！なんでもするから！」
「駄目よ。あれだけ怒らせないでって、いったのに。大老の命令だから無理。」
「ちょっと見るわよ。もう少し拡張しないと機械が入らないわね。二日は、我慢して。」
笑いながら出て行った。麻酔と筋弛緩剤が切れてくると股間に激痛が走る
「痛い！痛い！外してー！イヤー！」
校門括約筋と膣口横の筋肉に力が戻ってくる。
直ぐにメイドが腰に注射針を打つ。
栄養は点滴から、後は弛緩剤で閉まりの無くなったアナルから汚物、尿が滴り落ちる。
メイドが来て笑いながら股間を拭き取る。
2日後、女医が白衣姿の男達を連れてくる。
「どう？もう行けると思うけど？」
男が股間を覗き込む。
「機械は入るな。手も両手がいけるから大丈夫だろ。」
「じゃあ仕込む？」
「おい！持って来てくれ。」
男の助手が水槽を台車に乗せて持って来た。「なにをするの？もう虐めないで」

股間に突き刺さる機械を退けて違う機械を取り付けた。下腹部の奥に鈍痛が走る。
「なに、なに、なんなの？」取り付けた機械にクリーム色の液体を入れてスイッチが入る。グォーン下腹部が膨らんでくる。
「く、く、苦しい。お腹が変になる」
妊娠６カ月ぐらいのサイズになる。
「く、くるしいよ」
男は構わず液体を退かし何かが蠢く水槽を機械に取り付けた。
水槽に圧力が掛かる。ニュニュニュー。
東南アジアのドジョウが大量に筒の中を泳いでいく。
細いドジョウが子宮口に入っていく。
子宮内でも、藻掻くドジョウ。
「イャ！イャァー！お腹の中がウニョウニョ動く！」
ミチルは気絶した。
ミチルの膨らんだ腹が蠢めいている。
「本番まで熟成したら出来上がりだ。」
満足そうに男達は機械を押して出て行った。
子宮口にはまだ管が刺さり股間から伸びている。
女医が腹を触りドアから出て行った。

第六章　主婦たちの誤算

南国の独特な甘い香りのする空港ロビーに４人の２０代後半から３０代前半の女性達が陶製のソファーに座るといた。
花柄のブラウス姿のアマネ。
胸は大きく無く、薄幸な顔立ちが南国の空港には似合わない。
グリーンのワンピースに白いカーディガン姿のアイ。
黒いサングラスを掛けた有閑マダム。
整った鼻筋、肉感的なポテッとした唇に真っ赤なルージュをしている。
二人より若い胸の大きなマイ
白いＴシャツが胸の大きさを強調している。

黒く焼けた素肌にショートカットのボーイッシュな髪型が似合う。
顔も少年の様な幼くて凛とした、焼けた顔立ち。
Ｆカップの胸が目立ちすぎている。
黄色いシャツ姿のユウ。
普通の高校を出て普通の結婚をした団地妻。同じくＦカップの胸が
普通の顔には似合わない。
三人は同じ幼稚園のママ友達である。
アイの知り合いのホストクラブで使い過ぎ、アイから簡単なアルバ
イトだからと密輸の手伝いを持ちかけられた。
下着に金のインゴット、アソコに薬を押しこんで日本に持ち込む。
今まで５回、密輸はした。
南国のリゾートで１日、遊び翌日に帰国する。旅費は全て密輸組織
が負担。
一度の密輸で一割の報酬が貰える。
マイとユウには未だ幼い子どもがいる。　最近、乳離れができ離
乳食になった。
アルバイトと夫、両親に幼い子どもを預けた嘘は気がひけたがホス
トクラブに有る借金は後、１５０万円。
後、２回やれば無くなる。
出発時刻になり、出国ゲートに向かう。
何時もの様に荷物を機械に通して、金属探知機のゲートを通る。
先にマイが通る。ユウが通ると
「ビービービービー」
けたたましい音量がなる。
ゲートに付いているランプが光る。
税関職員が麻薬探知犬をつれて４人に詰め寄る。
４人は女性職員に連れられ検査所に連れて行かれた。
女性職員に裸になるように促される。仕切りに犬が股間を嗅ぎ回る。
「パンティを脱いで脚を広げろ。前に屈みアソコを広げろ！」
キツイ口調で命令が飛ぶ。４人は命令に従い脚を広げ、アソコを指

で開いた。
ズルっと、ゴム手袋をした指を突っ込み、かきまわす。ポトンとラップに包まれた、葉巻きの様な状他の物が落ちると、直ぐに手に取り横に立っていた別の職員に渡した。
検査結果が出るまで裸で立たされている。
ドアが開き職員が入って来た。
「麻薬密輸入で逮捕する」
全裸の上に下着も着けずオレンジ色の囚人服を着せられトラックの二台に載せられ警察に連行される。
一人ずつの独房に入れられる。
ユウはコンクリート剥き出しの檻に入れられた。
独房には小さな窓があるだけ、トイレ代わりのタライと毛布が1枚。
時折、物珍しそうに看守が観に来る。
私、どうなるのかしら子供はどうなる?考えても答えが出ない。
「メンカイヨ」
看守に連れて行く部屋に白人の男が座っている。
「アイさんから頼まれた弁護士のジャックです。手短に言います。三日後に判決が出ます。翌日に刑が執行されます。」
「何故ですか?そんなに早く裁判って終わるの?刑は何年ですか?」
「薬物の密輸入は死刑です。」
白人の弁護士は淡々と話した。
「え!死刑!」ユウが狼狽する。
「日本と違い東南アジアの国は重罪です。」
「また、犯罪が多い為に刑務所での長い刑は有りません。」
「お願いします。助けて下さい。」
「この国は、発展途上なので賄賂で無罪になります」
「どうしますか?アイさんの知り合いから、お金は借りられますが?面会は今日だけです。今、決めて下さい」
「お願いします。出して、助けて下さい」
「わかりました。動きます。今日中には解放されますよ」

監獄で座り自分の身の上を心配した。
天井では小さな蜥蜴が歩きまわっている。
夜になり、看守から檻から出るように、言われ服とカバンを渡された。
刑務所の外の車にアイとマイ、アマネが立っていた。
三人で抱き合い喜んだ。
「これから、借金を肩替わりしてくれた人に逢いにいく。クルマに乗って。」
車はワゴンタイプのバンで運転席に現地のドライバー助手席にジャック、後部座席にアイ達が乗った。
市街地を抜けてジャングルに入る。
辺りは街灯も無く真っ暗なジャングルが見えるだけ。
ジャングルをぬけると海沿いに灯りの眩しい一帯が現れた。
レジャー施設があるなんて初めて知った。
施設内の４階建てのビルに着く。ロビーに大きな体格の黒人が立っていた。
ガイだった。
横に居る黒のロングドレスを着た女性がジャックに近づく。
「ジャック！この方達？上に上がって。応接間で話をするわ。」
横須賀の病院でドクターと呼ばれていた女医だった
アイは顔見知りらしく会釈をドクターにした。
ニコリと笑いジャックと話をしている。
アイ達は応接間に通された。
皮のソファーに座っていると先にジャックが入って来てアイ達の前に座る。
よく見るとジャックは白人とアジア系のハーフである。
パーマを掛けてウェーブのかかった白髪に火に焼けた彫りの深い顔。
アジア映画に出てくるエリートサラリーマンのような凛とした容姿
次にレスラーのような黒人がドレス姿のドクターと入って来た。

ドレス姿の女性はジャックの横に座る。ドレスのスリットからは白い太股が見える。
入り口に黒人がガードマンのように立っている。
ドクターは長い黒髪を背中迄伸ばしている。
ドクターもアジア映画に出るような凛とした顔をした女性だ。
「ジャックから聴いているわ。アイの知り合いと言う事で今回は支払ったけど、一人、日本円で1億だけどいつ返せるの？」
「私は帰国後に直ぐに払います」先にアイがそう言った。
「他の方々は？」
マイ、ユウ、アマネは何も言えない。
「分割は無理ですか・・・・」
ドクターは溜息をつき、切り出した。
「貴方、分割って何年払うの？利子が付いたら一生返せないわよ！」
アイは俯いている。
「貴方達、５年、海外の売春宿で働くか、２０本程、海外配信のアダルト映画に出るか決めて！」
先ずはあの男が相手よ。」
見ると黒人のガイがズボンを降し、ペニスを出している。
４人は大きさに驚いた。
小学生ぐらいの子供の腕が股間に垂れている。
長さは膝まである。
「勃てば３８センチかしら？殆どの女性は一回で壊れるわ。どうする。」
「仕方がないわね。貴方と貴方！其の大きなバストを売らない？子供を産んで未だ一年ぐらいよね。私は美容整形が専門なの。どうするの？」
「胸を取った後は？」
「取ると言うより交換ね。まだ母乳の出る乳房は移植後に馴染が早いの」
「もういいわ。ジャック、警察に電話して。払う気無いみたいだか

らこの国の司法に任せるわ。死刑でしょうけど。死刑執行まであのゴキブリと蛇だらけの牢屋で暮らしたらいいわ」

「アタシの胸でも良いですか？」

アマネがドクターに言った。

「そこで脱いで見せて。」

アマネが上着を脱ぎブラを外した。

「二人より小さいケド良いわ。」「わたしも胸で払います。」

マイもそうに言い出した為、ユミも私も胸でお願いします。と小さく答えた。

ドクターが携帯電話で看護師を呼ぶ。

「三人を検査してくれる。応接間だからストレッチャーを3台ね。」

地元民の看護師が応接間に入って来た。

三人は応接間を出て其々のストレッチャーに横たわる。

そのまま、白い無機質な病院の廊下を看護師に押され各自の部屋に運ばれた。

ユウは看護師に指示され全裸になった。

病院服を着せられ採血をされる。

次に看護師は両手に収まりきらない両乳房を片方ずつ揉みほぐしていく。

　少し大きめのコリコリした茶褐色の乳首から母乳が滲み出し、次第に勢いよく飛び出している。

両乳房の母乳を検査した看護師はユウの腕に点滴を刺して病室を出て行った。

点滴に睡眠薬でも入っているのかユウは深い眠りに着いた。

アマネが病室のベッドに座って花柄のブラウスに着替えて座っている。

「アマネ！出国するわよ。薬とインゴットは隠した？」

「ええ。アソコとブラに隠したわ。」

「私は明日に帰国するから。貴方を空港まで送るわ」

「時間は２４時の飛行機になるようにゲートを通ってよ。わかった

？」

「わかったわ。また、日本で会いましょう。」

一階に降りた二人は玄関の車に乗り暗闇のジャングルを走って抜けて空港に向かった。

空港ロビー入り口に着きアマネは車を降りた。

アマネが空港に入るのを見送りアイは車を走らせ病院に戻った。

アマネはトイレでアソコに収めた薬を確認して、ロビーの待合室で時間を待った。

２４時の飛行機に合わせてゲートをくぐる。

ゲートに入ると

「ビービービー」

警報とランプが光る。

「お前！」

少し早く入ってしまい、ゲートの検査官は組織の息のかかった人間ではなかった。

直ぐに再検査をされて警察に連行された。

警察内分にいる組織の人間からジャックの携帯に連絡がはいる。

「わかった！釈放してくれ。ジムを迎えに行かすから」

アマネが捕まり警察にいる事をドクターに伝える。

「ジム！アマネって子、貴方の好きにして良いから。明日のオークションに出すから壊さなければ良いわ。それとアイもガイに任すわ」

「もうダメですか？あの二人。」「この仕事は運とタイミングよ。警察幹部と空港幹部は押さえているけど正義の味方はどの組織にもいるわ。小さいミスが組織の壊滅に繋がるのよ。」

大型ワゴンに乗りジムがアマネを迎えに警察署に向かう。

アマネは警察署の裏の出口に立っている。

横には白い警察服を着た警察幹部。

二人の前に車を付けジムの巨体が車から、おりた。

「アマネさん車に乗って」

アマネはワゴンの助手席に乗った。

ジムが警官と話している。
警官がジムに封筒を渡し、カバンを受け取りワゴンの後部座席に置いた。
「アマネさん帰国は延期ね。病院に戻るよ」
ワゴンはジャングルのなかを走り出した。
アイはドクターと話をしている。
「アマネが空港で捕まったわ。薬とインゴットは没収された。アイ、どうするの？」
「私は関係ないわ」
「成功報酬は欲しい。でも失敗したら知らないは通じない。貴方、もういいわ。ガイ！連れて行って」
「これから気持ちよく成るね」
ガイの腕がアイの細い腕を掴んだ。
突然ドアがノックして
「ドク！ちょっと良い？泥棒猫を捕まえたわ
見ると黒人ナースのジニがメイド姿の東南アジア系の女を二人連れてきた。
「ジニ何、この子たち？」
「ドク、先月から病院のお金や備品が無くなったりしていたのよ。今日、捕まえたわ。」
「へー、この施設で盗みを・・・・ガイ、この子たちアゲル、好きにしなさい。その代わりアイとアマネはオークションにだすわ。若い子の方がいいでしょ」
「ジニ、アイを一応、検査をしていて。」
ガイが娘たちを連れて行く。
「助けてください。許して」
「ジニ、なにを喋っているの？」
「助けてだって」
「駄目よ。見せしめにしないと」
二人を腰に抱えてガイがロビーから出ていく

「アイ、アナタも大人しくしてね
アイはドクターをにらみながらジニに背中を押されロビーから出ていった。
しばらくしてアマネがロビーに入る。
ジムの太い手がアマネの花柄のブラウスを引きちぎった。
「あ」
力任せにブラジャー、パンティもはぎ取る。
薄幸な顔が白くなりBカップの胸と股間をそれぞれ手で隠す。
左手を胸。右手を股間。
胸は隠れたが、右手を押さえる股間の手の隙間から太い陰毛が出ている。
ジムの股間の膨らみを見て恐れている。
ベルトの上、ズボン上部から顔を出す、赤黒い亀頭。
缶コーヒーの缶ぐらいの大きさがある。
夫しか経験のないアマネは驚いている。
アソコが裂ける。
「ジム！その子はオークションよ
いつもの部屋にガイと若い子が居るわ。」
ジニがジムの性欲を止めた。
渋々、ジムがアマネを諦めてロビー奥に消えた。
「アマネさん、オークション出品前の検査をするわ。大人しく付いてきてね。其れともジムを呼んだ方がいいかしら」
アマネはジニの後ろに付いていった。
第七章　泥棒猫のお仕置き
ドアを開けジムが部屋に入った。
ガイが泥棒をした女達を荒縄で縛ってベッドの上に転がしている。
まだ、幼さの残る黒い肌に黒い髪を束ねている。ツインテールの髪型がメニ。
ポニーテールがマム。
二人とも、メイド姿でジムとガイを見ている。

小さい鼻とクリクリした目。膨らみ掛けた小さな胸。
ジムもガイも二人には同じような顔に見え見分けが付かない。
「此奴がダブルでこっちがシングル」。
簡単に二人にあだ名を付けた。
「コンコン」
「また、お預けか？」
ジムが扉を開いた。
トレーに針とワイヤー、特殊な工具を乗せてジニが立っている。
「あの子達、売れたの。」
ジムがムスッとした。
「また、お預けか？」
再度、嫌みを言う。
「違うの。いつものお客様の希望で釣りに使うの。だから壊した後に加工をお願いね。」
ジムがニヤリと笑い、嬉しそうにトレーを受け取った。
何度か加工はしている。一番、楽しい仕事だ。
振り向き、ガイにトレーを見せた。ガイも嬉しそうに笑う。
ジムがツインテールの少女を抱きかかえてベッドに投げた。
荒縄を腕に巻き強引に千切る。
怪物的な力で藁のように千切れた。
そしてツインテールの髪を掴み、片腕で自分のズボンを脱ぎだした。
デロンとズボンから子供の腕が垂れ下がった。
「舐めなさい」
鶏の卵位の赤黒い鬼頭が少女の顔の前にある。
恐る恐る、赤黒い亀頭を舌先で舐める。
ムクムクと怒張をしだす、ジムの獣の様なペニス。少女の顔よりも大きい。
口に押し当て
「口に含め。」
髪を握り唇に亀頭を押し当てる。

「入らない」
たどたどしい日本語で拒否をする。
こうすれば入る。
片手で少女の顎を掴み
「コクン」
「アガガガガ・・・・・」
顎が外れ瞳から涙が滲む。
泣き顔を見て余計にジムは興奮した。顎の外れた口に亀頭を押し込む。「ウゴゴゴゥウゴゴゴ」
口の端に血を滲ませながらペニスが入っていく。
目は大きく見開き、鼻からは鼻水が垂れる。手をバタつかせてもだえる。
もう一人の少女は怯えながら見ている。
ガイがポニーテールの髪型をした少女の荒縄を解きメイド服を剥ぎ取る。
「猫には尻尾が必要ね。」
強引に白いパンティを剥ぎ取り、
アナルプラグを小さいアナルに押し当てた。
「嫌、痛いです。無理です」
黒いアナルプラグの先にグリセリンを塗り再度押し当てる。
先が少し入っていく
「フン」
ズルンとアナルに滑り込んだ
「あーーーー裂けるーーーーー」
尻を押さえてプラグに手を伸ばし抜こうと藻掻く。
ガイがプラグに猫の尻尾を付けた。
「泥棒猫が出来た」
満足そうにニコッと笑う。
「痛い、痛い、取る、取る」
尻に手を回しのたうち回る少女の横でガイは自分の服を脱いでいく。

レスラーの巨躯に臍上までそびえ立つ赤黒く怒張したペニス。
黒光りした体躯も怒張したペニスも破壊兵器のような肉体。
のたうち回る、少女の両足を持ち
そのまま開く。
少女の股間に唇を近づけ、ピンクの小さいヴァギナに舌を這わす。
「嫌、痛い。気持ち悪い。」
気を悪くしたガイはクリトリスに歯を立てた。
「ヒギ！」
悲鳴に機嫌がよくなり噛んでいる歯に力を入れる。
「イギィ、切れる」
下半身丸裸に上半身はメイド、ガイはバストにあまり興味が無い。
唾だけで余り濡れていない小さな性器に卵の様な亀頭を押し当てた。
膣口が小さく入らない。太い人差し指を膣口に入れて両手で強引に
引き裂く。
「メチ」
「グワ。アーーーーーー」
会陰が裂ける。
再度、押し込む
「クーーー」」
眉間に皺を寄せ痛みに耐える。
強引にガイが腰をグラインドさせる。
「アガ！ウガ！グゲ！」
叫びしかでない。
ジムに強引にディープスローとをさせられたツインテールは口の端
に血を滲ませ、大口のまま気絶している。
「ヒューヒュー」
鼻で辛うじて呼吸が出来ている。
「ジム！ゲリラの娘を犯した時を思い出すね」
「ガイ！この瞬間が此処の仕事の良いところだ」
一晩中、二人の少女を嬲り。

満足げに籐のソファーに座りタバコを吹かし裸で二人が座っている。
陵辱された二人はベッドでグッタリ横たわっている。
「ジム！今からは工作の時間だ」
テーブルの上のトレーを手にしたジム。先に少女に近づき、俯せにして背中に乗るガイ。
背中に乗られて意識が戻る、ポニーテール。
ジムが口にタオルを詰めてその上から別のタオルで縛る。
クッションを尻のしたに置き、位置を上げる。
ガイが両腕を腰の下に廻し尻を固定する。
医療用のつの字に曲がった針に細いワイヤーが付いている。
肛門も犯され少し開いた穴に右手の指を入れ広げる。サーモンピンクの肛門内部が見える。肛門から少し奥、４，５センチ奥の直腸部分の下側、膣との間の薄い筋肉に銀色の針を突き刺す。
「ガーアアアーー」
タオル奥で籠もった叫びが聞こえる。
膣まで抜けた針に肛門を開いていた、指を抜き、膣内部に指先を入れ引っ張る。
肛門からワイヤーが入り膣から出てくる。薄い肉をワイヤーが滑り、目を大きく見開いてイヤイヤと頭を振る。
開通したワイヤーを５センチずつ出して、ペンチで切るとリングをワイヤー同士の切り端に通し別のペンチで閉める。
「出来たジム、立たせて」
ジムが仰向けの少女の脇に手を入れて持ち上げた。涙をボロボロ流しガイを見る。
ニタァと笑いながら、少女の小さい膨らみの天辺に、小さく有る乳首を引っ張った。
何を此からされるか分かったのか少女が目を瞑る。針先が下から乳首を刺す。
「ンムグゥ」
ガイが力を入れると乳首と乳輪の境の皮が盛り上がり銀色の針先が

見えた。
ガイが上から出た針を持ち引っ張る。
「い！」
上下から飛び出したワイヤーをカットして輪を作った。

両乳首、股間に輪を付けた少女が
出来上がる。
さあ、次に行こうか。
悶える声で起きたツインテールに二人は飛びかかる。
「イヤー。ヤメテ」
ベッドに横たわる二人の少女を横目に再びソファーに座りタバコを
吹かす。
二人とも全裸で股間からデロンと
ペニスが垂れ下がる。
遊び終えて怒りが収まったペニス。
「コンコン。ジム、良い？」
ドアが開きジニが入ってきた。
「オゥ、相変わらずの大きさね」
「一度、するか？」
「壊れるから辞めておくわ」
「あの二人、連れて行くわね」
ジニは犬用の首輪を二人に取り付けてドアから出ていった。

第八章　宴1フィッシング
熱帯特有の蒸し暑さが夕方のスコールで少しヒンヤリする。
もうすぐ日も落ちる。
ジャングルに似合わない舗装された道路を何台もの高級外車が走っ
て行く。
今日は１０日、組織の施設でオークションと宴が開かれる。
客は全世界の政財界・ギャングのボス達。男は軍服かタキシード。

女性はドレスか正装。
車から降りる客は皆、黒い仮面を付けている。
敷地内には各組織の男達が武装して警戒している。
その中に武装したガイ・ジムも居る。
会場のレストランは普段はシーフードの有名なレストラン。戦前は
某国の植民地で建物はその当時の迎賓館後で重厚なヨーロピアン調
の建物で有る。
一階の大広間には半円形のステージが有り、昔は楽団が音楽を奏で
ていた。
ステージ上に大型のスクリーン。
ステージ前にはテーブル席が４席
中２階にはテーブルカウンターが
８席ほど有る。
ステージ前は超ＶＩＰ席
暗闇に覆われた頃合いで宴が始まる。
「みなさま、本日も宴にご参加下さり有り難うございます。今宵も
賭け事、オークション等でお楽しみ下さい。まずは会員様より頂い
たフィッシング動画です
どうぞご観覧下さい。
モニターがテーブル席の目線の高さまで、降りる。
紺碧の大海原をクルーザーが走る。徐々にクルーザーに寄ってくる。
クルーザーには撮影のカメラマンも乗っている。
クルーザーの船尾。
水中にカメラが付いていて、大型魚用の竿が２本付いている。
アジア系の恰幅の良い男が二人。
同じくアジア系のトップレスの女が二人。
レスラーの様な体格の男が二人。
一番上の操舵室に一人。
船の速度が落ちていく。
「ここらがポイントじゃ」

操舵室の初老の船長が男達に伝える。
レスラー二人が船室に降りて行く
一人ずつ裸の女を引きずり出す。
両方の乳首にリングが一つずつ。
剃られた股間にリングが一つ。
頭に被せた黒い袋を取る。
青い目、金色の髪、真っ白な肌。白人の若い女が猿轡をしている。
辺りを見渡し震えている。
「オゥ！マリア！」
中二階席、一番端のテーブル席の男が叫んだ。
３階特別席の狐目の男が呟く
「へーあの子、中南米組織のボスの身内？」
「いや、愛人だって。敵対組織が誘拐して、ウチに売りに来た。面倒だからアジアンマフィアのオッサンに売った。まさかルアーにするとはね。」
リュウが答える。
「次も面白いよ。」
もう一人の裸の女に被された袋が剥がされた。
「ＮＯ！ミランダ！」
二階席、反対側のテーブルの男が立ち上がる。
「ね。誘拐した組織のボスの愛人」
「お互いに愛人を誘拐してウチに売ったの？」
「そう、ウチも巻きこもうとするから、マフィアに売ってルアー。まあ、三つどもえで潰しあいに成ればウチが弱った組織のシマに乗り出すからね。」
「たかだか、愛人で戦争はしないよ。」
狐目のスラリとした男が他の支部のキム。
東南アジアに有る某国のレストラン兼病院が東南アジア本部。
本部はアジア、アメリカ大陸、
ヨーロッパ、中東アフリカと４カ所にそれぞれ有り、病院とレスト

ランを経営している。
毎月、持ち回りで宴を催す。
今回はアジア本部の番。
それぞれの本部にボスが居て、その下にドクターと呼ばれる支部長。
リュウは支部長の下に位置する。
リュウもキムも何人かは分からない。組織の概念で国籍は余り関係ない。
「お！始まるね」キムが呟く。
先にマリアの体に仕掛けが付けられる。首に小型の浮き輪をはめて水死の保護をする。
臍の辺りにチェーンが巻かれ、大型魚用の釣り針が垂れ下がる。
大型の釣り竿から伸びたワイヤーを股間の輪に掛けてその先、４メートルにもう一つ針が付いている。仕掛け上部にあるフックに縛った両手を掛ける。
臍に有る、フックから伸びたワイヤーを乳首に掛ける。
全て付け終わると、両腕を伸ばした女の腹と股間から垂れ下がった所に針の人間ルアーが完成した。
もう一人のミランダの体にも仕掛けが取り付けられ猿轡が外された。
「ノゥ！助けて。お金ならパパが出す」
ミランダが金髪を振り哀願する。
金髪に鼻筋の通った彫りの深い美人。
少し焼けた肌と９０は有るバストはピンクの乳首が上を向きプロポーションも良い。
マリアも金髪に白い肌。同じく淡いピンクの乳首。
グラマラスな肉体をしている。
「勿体ないね。ややこしく無ければ組織で使えるのに。」
マリアの股間から伸びた針に生き餌の鰹が付けられる。ビチビチ跳ね回るたびに股間から肉ビラが見える。
マフィアの女は其れを見て笑っている。
一人は東南アジア系だが鼻筋が通り二重が印象的な美女。

トップレスの胸も笑うたびに揺れている。
もう一人は、韓流女優。エキゾチックなアジア美人だ。胸は小降りだがスタイルは良い。
「笑って居るけど、次回は自分がルアーに成らないって確証無いのにね」
先に鰹が海に落とされ、腰を引かれたマリアが後退して船尾から落ちる。
次にミランダに付いた鰹も海に落ち、ミランダも落水する。

船尾のカメラに切り替わり望遠で二人を写す。
「ノォー、マリア」
泣きながら勃起をしているギャングのボス。
「やっぱり此処の客って変態だね」
「変態が多いから俺たちの商売が成り立つ」
リュウとキムが酒を飲みながらモニターを見ている。
「此処で賭を行います。ミランダに食いつくのは魚か鮫か？また、マリアに食いつくのはどちら？先に食いつかれるのは？どちら？」
さあ掛けて下さい、開始。」
モニター画面の横に倍率が出る。
「はい。終了。其れではフィッシングをお楽しみ下さい。
画像が動き出す。
後部船上カメラがミランダとマリアの姿を映す。
船は低速になり鰹を泳がせる。
二人の後方に魚影が写る。
巨大な魚影がマリアに接近する。
マリアが水没する。
3分後に浮かび上がるマリア。
魚が食いついたらしく左右に振られている。
レスラー並みの男がマリアの手首のワイヤーを引っ張る。

股間の仕掛けが外れずに肉を引き裂き肛門と膣が繋がっている。そこから血が流れている。
船まで後、３メートルでマリアの体が海上に飛び出した。
鮫がマリアの腹に食いついて飛び上がる。鋭い鮫の顎でマリアが腹から半分に別れた。
「シャーク」
マリアのワイヤーを離し、鮫の食いついた針を男が二人がかりで引っ張る。
魚はマフィアのボス。
鮫は男が二人がかりで引く。
男達は二人がかりで鮫を引き上げた。体長は3メートル。魚はシイラという平べったい魚だった。
マリアの魚の取り込みでミランダは誰も見ていなかった。
ミランダの繋がれた釣り竿のリールを巻くと仕掛けだけが付いている。船尾の海上にミランダの虚ろな目を開けた頭と真っ赤な水面夥しい数の鮫の背びれ。マリアの流した血が鮫を呼んだようだ。
「賭の正解はマリアで最初に魚でした」
賭に当たった者は歓声を上げている。
「再生しますが後は鮫しか写りません。どうぞ。」
次のルアーは本部に居たメイド二人。
最後は黒人が一人。
最終的に釣果は鮫が４匹、魚が１。
船尾に鮫を括り付けて帰港する。船影をドローンから上から写しながら映像は終わる。
「今日の宴には人食い鮫のフカヒレなども登場します。
次はモンキーファイトです。どうぞ」

宴２　ファイト

モニターに女のヴァギナのアップが写し出された。銀色のクスコが、

縁が黒ずんだ肉ビラを広げながら膣口に潜っていく。ネジを廻していくようで、ペリカンの口が開き
奥に薄ピンクの瘤のような子宮と真ん中に赤い横線のような穴が見える。
細い金属棒が穴に入っていく。
女は微動だ、しない。
金属棒には紐が付いている。
金属棒の枝を押しクスコが外れる。肉ビラが閉まり股にシワクチャな肉の貝から紐が出ている状態に成った。
画面が変わり丸い尻が映し出される。
窄んだアナルにローションが塗られ、銀色の卵にも塗られた。
銀色の卵にも紐が付いている。
男の手が写り、卵をアナルに押し込む。ズルンと卵が収まった。
今度は尻を振って悶えている。
画像は卵と金属棒の説明に移る。
金属棒の柄を引っ張ると、先が傘のように開き傘の足の部分は鉤針状に成っている。紐を引っ張れば子宮内を裂き
子宮口から膣を裂きながら外に出る状態に成る。
卵の説明に移る。紐を一段引けば
卵から鱗状の小さい刃が飛び出る。もう一段引けば卵が爆発した。
「女性の内部に収まった傘と卵の紐を引っ張れば体は壊れます。
人間が勝つか、猿が勝つか?お掛け下さい。女性は元東南アジア支部所属の女殺し屋ロン、リー嬢です。対する猿は１０匹。どうぞ」
「キム、ロン・リーってオマエのところの殺し屋だよな?何をした?」
「組織の金の横領と横流し。捕獲中に部下が3名やられたよ。」
「だろうな。でも、捕獲より子宮内のＧＰＳを爆発させれば終わりだろ?」
「見せしめにするから、生け捕れってボスの命令だよ。各支部に見

せるって」
「オッズが８０対２０だよ。独り勝ちになりそうだな。」
「え？リュウが賭けたの？」
「ボスが映像を流すのだろ？
猿の勝ちじゃない。」
「終了。映像を再生します。」
に」金網が張った特製リングに
髪の黒いアジア系の女が立っている。
髪を後ろで結び、後ろ姿は裸の若武者ような後ろ姿
カメラが前に回る。切れ長い瞳はは対戦相手を睨んでいる。
金網の扉が開き、猿が檻に放たれる。リーは全身に力を入れて構える。筋肉が浮き上がり乳房が筋肉に付いた体は格闘家の体だ。
格闘家の体に不具合な物が股間から垂れ下がっている。
最後にゴリラが入った。
「ブー・ブー」
ブーイングが上がる。
「やっぱり。入った」
「「リュウ分かったの」
「普通の猿には負けないよ。アイツは」
ゴリラで驚いたリーは先にゴリラに飛び掛かる。
ゴリラの目を狙い目潰しをした。
片目にリーの指が入る。
目を潰されたゴリラが手を振る。
リーの肩に当たり倒れる。
猿が飛び掛かり、リーの顔に飛びついた猿が鼻と目を指に引っ掛けた。猿の爪で裂かれ、血が垂れる
頭を下げた所にゴリラが腕を振り下ろす。
倒れた瞬間、猿が尻の紐に付いた餌を引っ張る。リーの顔が苦痛にゆがむ。もう一匹の猿も餌を引いた。
「パゥン！ボン！」

アナルからジェット花火の様な火柱が吹き出す。
股間から黒い煙を出したリーは体をくねらせる。
猿たちが一斉に飛びかかり乳房に牙を立てる者、膣から伸びた紐の餌を引っ張る猿。
リーは呻き声も上げられずに倒れている。
ゴリラが近づいて来て猿たちを退かす。
最後に子宮口に差し込んでいる紐を引っ張るが抜けない。
ゴリラが片足を持ち上げて、もう片足に体重を乗せ大きく引っ張った。裂けた股間から足が千切れ股間から大きく裂けている。
ゴリラの手には餌が握られ、元子宮の肉片が紐に引きずられながら元殺し屋リーの股間から這い出る
「ウォー」
観客達は立ち上がり歓声を上げる。
「賭は猿の勝ちです」
誰も賭を忘れて見入っていた。
画面が消えてモニターが上がっていく。

宴3調理

料理をお出ししていきます
人喰いザメのフカヒレ、クリームソースを。ジュレのせです。
クリームソースはステージで御造りします。
各テーブルにフカヒレが配膳され
フカヒレからは湯気が登る。
次にジャングルジムのような骨組の上に裸の女が大の字に固定され2台運ばれてきた。
両の乳房が水風船のよう垂れ下がり、両乳首から母乳が滴っている。
頭を黒いマスクが覆い口だけが、出ている。
白衣のシェフが乳房の大きいユウ
に近づき牛の乳絞りのように乳房を両手で揉みしだく。

「あ・あぁぁぁぁぁぁ」
乳首からから勢い良く母乳が飛び散る。
続いてマイ近づき同じく
乳房を揉み母乳の出を調べる。
「おい」
合図と共に二人の助手が搾乳機を押して出てくる。
先ずはユウの両乳房に透明のカップはめ込み、搾乳機のスイッチを入れた。
「キュィーン。」
乳房に勢い良くカップが吸いつく。
カップと両乳房の境界がカップに吸い込まれて皺が依る。
「あ！痛い！お乳が取れちゃう」
両乳房に装着されたのを点検し、
股間のヴァギナにバイブを挿入した。
同じようにマイにもカップ装着してスイッチを入れる。
「キューーーーーュウーー」
ユウよりも大きな音を機械が発しながら乳房が伸びる。
みるみる搾乳機に備え付いている
瓶に母乳が溜まりだす。
１５分程で瓶に半分、５００ｃｃ程溜まる。
助手が乳房からカップを外す。
乳房と肋骨の繋ぎ目に赤い筋が滲んでいる。ダラリと垂れた乳房を揉み何かしら感触を確かめる。
白衣姿の助手がポケットから銀のケースを取り出す。
中には注射器と薬品。
薬品の蓋に針を刺し、中の薬液を吸い込む。

乳房と肋骨の隙間に針を刺し、薬液を注入した。
5分後、乳房を揉んでも反応が無い。
シェフと呼ばれる男が右手にマイクを持ちしゃべりだす。
「皆さま、ご覧ください。我が組織が開発した薬の効能を・・・」
マイクを置き、乳房と肋骨の間に
手にしたメスを押し当て下乳房の
境界から切り出す。
銀色のメスの刃先が乳房に当たる。
客は先ほどの注射が麻酔薬だと思っていた。
「あぅん。はぁぁ。」
ユイが恍惚の喘ぎを上げながら
唇から涎が垂れる。
尻の下に水溜りが出来る。悶えながら愛液が滴り落ちている。半分
ほど乳房が切れ、切り口から血が
落ちる。助手が両手で乳房を手に持ち補助をする。
片方の乳房が奇麗に切り取られ切れた乳房をクーラーボックスにお
さめる。
シェフがマイクを持ち
「是は苦痛を快楽に変える、合成
薬です。苦痛を快楽。切られても、銃で撃たれても快楽に変えます。
」
「すごいなぁ。あの薬。無敵の軍隊が出来るよ。」
「ジガバチって蜂、知っているか?獲物に快楽物質を注入して獲物
の体内に子供を産むのさ。幼虫
になり獲物を食べて育つのだけど、死なないように食べられても
苦痛で死なない為に快楽物質で生かすのさ。」
「ただ、未だ何時間効くのか分からないから。実験。」
キムとリュウが見ているモニターの中でユウの両乳房は切り取られ
てクーラーボックスに収まり助手が運び去った。続いてユウも切り
口から血を垂らしながら台ごと奥に消えた。

見るとマイの巨大な乳房もクーラーボックスに入れられて運ばれた。
マイを載せた台も運び出される。
「搾乳した母乳で上に掛けるソースを御造りします。お待ちください。」
「リュウ、あの乳房を取られた女はどうするの?オークション?」
「いや、幼子が居るから帰国させるよ。罪はアイに被せた。なに、組織の怖さは、分かる。」
「子持ちに弱いね。」
「日本の警察は幼子持ちの母親に神経質に、成るのだよ。」
鍋で暖められた母乳からは乳臭さが消えて食欲のそそる香りに変わる。
出来上がったソースをウェイターがフカヒレに掛けて回る。
「次はドッグファイトの実演です。モニターではなくステージでライブで見せます。
準備が出来るまで会食ください。

宴4犬

「此より獣姦ショーの始まりです。女優の登場です。」
拘束台に固定されたナツコが運ばれて来た。
髪は黒髪に染め変えられ、清楚そうなメイクに変わっている。
両腕は頭の上で台に固定され、腰でベルト台に固定されている。両足を広げてYの字に開き足首が固定している。拍手と歓喜に包まれた異様な様子に狼狽えている。
口に噛ませた猿轡が外される。
「てぇめぇら。ゆるさねぇからな!ぜってぇパパに言って殺してやる」
日本語での罵詈雑言なので意味が分かる観客は少ない。
「グウウウウウウウ」
獣の唸りが聞こえてくる。

２メートルは有る大型の犬が飼育員に引かれて会場に入ってきた。
「ウォー」
キムが驚く。
「あれ、いつもの大統領の犬じゃ無いよな。」
「ウチの組織で訓練された軍用犬。拷問用にも訓練している」
犬の顔には噛みつき防止のマスクをしているが首を振り暴れている。
犬に合わせて台の高さが調整される。ナツコは震え、眼に涙を浮かべる。ナツコの股間に、鼻を当て臭いを、嗅いでいる。
犬の体が上下に動き、後ろ足の間からムクムク木の丸太の様なペニスが怒張する。
「アソコも改良したの？犬のサイズじゃ無いよな」
「拷問用だよ。大統領のリクエスト。」
「相変わらず、サドだねぇ。捕まえたゲリラの女をいたぶるのか？」
「此処の会員はサドしかいないよ」
「始まるね」
犬のペニスをナツコの割れ目に、潜らせた。縁の黒ずんだ大きめの肉ビラが開きペニスの先をくるんでいく。
飼育員が腰を押す。
「グォ」
犬の叫びかナツコの叫びか分からない。
構わず、係員が犬の尻を押す。
挿入部にカメラが寄る。
「ミチミチミチ」
音声が拾えるぐらいに音がする。
「いたぁー。いやぁー」
「オマエ達恨む！化けて出てやる」
４０センチの犬のペニスが収まったとたん、ナツコの顔から血の気が引いてきた。
「ヤベ。直ぐに薬、打って。
死にかけている」

インカムで喋ると飼育員が、ポケットからケースを取り出しナツコの腕に注射した。
血の気が戻り、ナツコの眼がトロンして来る。
「ウン・・・あっぁ・・あぁぁぁ」
犬も腰を振り続ける。
ヘソしたの下腹が犬に合わせてボコボコへこんだり出たりしている。
犬の興奮したとたん顔のマスクの枷が外れた。
「ガァゥ」
「ナツコの右の乳房に噛みついた」
「あぁあぁあああああ」
歓喜の声を上げるナツコ。
急いで飼育員が強引に乳房から犬の口を話すと乳房が裂け、自称Fカップの乳房からはピンクの肉の隙間に透明なジェル状の袋が見えた。
「ガァアアアァゥウ」
犬が大声を上げたとたんに
「ボコン」
破裂音がして、ナツコの下腹部のヘソ下を破り犬のペニスが飛び出す。
勢いよく精子を飛ばすとナツコの顔にバシャッと大量に降り注いだ。
「あれも顔射って言うのかな?」キムが笑いながらそう言う。
飼育員がナツコから犬を外す。
腹から出ていたペニスも腹に戻っていく。犬がリードを引っ張られながら連れ出されると残ったナツコは乳房を食い裂かれ、下腹、股間からは血を出し膣の割れ目は無く空洞になっている。
その様な状態になりながら悶えている。
「ああアアアあぁあああぁうん」
ナツコの台車も係員に押されて会場から出ていった。

宴4ミチルの処刑

続いて鉄棒に吊されたミチル。
両足はM字で膝から鉄棒に、吊された姿で係員に台に乗せられてステージに登場した。会場が暗くなる。
ミチルにスポットライトが当てられる。ミチルの腹は妊婦の様に膨らんでいる。
「本日のメインディシュです。」
「人肉か？食えないぞ、人は」
会場の客がざわつく。
一人、大統領だけヨダレを垂らす。
「子宮で熟成させた、魚料理です。ご心配なさらずに」
「此から取り出します」
助手が円錐の付いた器具をシェフに渡す。シェフがミチルの股間に近づく。
「あれは入らないだろ。」
助手がミチルの両脇から両手をミチルの割れ目に指を掛けて引っ張る。
ヌパァ
ミチルの割れ目、膣口がペットボトル大に開いた。
「オゥ」
女性も歓声を上げる。
「はぁあああああ」
「リュウ、あの女にも薬を打ったの」
「キム、打たないと先月韓流アイドルの時の様に成るだろ。あれは最悪だったぞ。」
「あれは最悪だよ。懐妊して1年後に黒い肌の赤子だぜ。せめて黄色なら」
「大老なら自分の子か検査するよ」
「特別ボーナスも無し。ナースは消えたよ。」
「災難だな。お！始まるぞ」

深々と円錐がミチルの膣に収まる。
「奥で当たる。スゴい！！逝きそう」
機械に付いているトリガーをシェフが引く。
「シュン」
ミチルの体が一瞬震え、臨月の様な状態まで腹が膨らんだ。
Dカップの形の良いバストが揺れる。困った顔に肉厚の唇。童顔ながらバスト、ウェスト、ヒップの体型も整っている。
「はぁあああああっ」眼を瞑り絶頂を迎える。
機械を膣から引き抜くと筒に粘膜のドロリとした液体が付着してのびる。
シェフが傍らに有ったトレーを股間の下の位置に置き、膨らんだ腹の上部を押した。
「あうぁ。なんか出ちゃう。」
膣口が段々と開き、ピンク色のゴムボールが膣から顔を出す。
ゴムボールには横に窪んだ穴が開いている。穴にシェフが指を入れ片手で腹を押す。
「あああああぅ」
ズルンとトレーの上にピンクの袋状の物と袋に引きずられて黄色い玉の様な物が落ちた。
「これなに？アタシから落ちた。」
すかさず穴にタオルを押し込む。
「はぁぅ。また入ってきた」
「おい。この女、裏に回せ。」
助手が会場から運び出す。
袋を切ると黄色いゼリー状の物が出てくる。中には東南アジアのドジョウが入っている。
「お待たせ致しました。ドジョウのゼリーです。」
「あの女の人形処理の映像はビデオに記憶しますのでお帰りの際、お申し付け下さい」
「配膳は係りの物が致します。私は処理で退席致します」

ワゴンにゼリーを乗せたウェイターが各テーブルを廻り皿に配膳していく。
「その、子宮と卵巣を譲り受けるわ。」
白髪の老婦人がウェイターに願い出た。
「分かりました。保存方法は？」
「真空パックにして頂戴」
「リュウ、あのマダム、前の韓流アイドルのも購入しなかった？何に使うのだろ？」
「キム、食おうがコレクションだろうが自由だろ？金になれば良いのさ」
「しかし、あの機械は、スゴいね。子宮を傷つけないをように子宮口周辺の筋肉と膜だけ、切るなんて。」
「電子カッターの改良版？よく分からないが今までは綺麗に内臓がとれなかっただろ？工事用機械の応用らしい。」
「シェフの本業は何？」
「本業がシェフで副業が医者らしい。誰も白人で５０代以外本名も知らないらしい」
「白髪交じりで短髪な髪型。白い肌に銀縁眼鏡。瞳はブルー。端正な顔、彫りの深い目鼻立ちは一流レストランのシェフの佇まい。裏の処置室に連れて行かれたミチルは最後の処置をされる。
シェフのメスと鉗子を持った腕がミチルの股の割れ目から入る。片腕で詰めたタオルを引きずり出す。
「バシャバシャハシャ」
滝の様に体液が落ちる。
ミチルは恍惚の表情を浮かべている。シェフの片腕が大腸を引きだす。助手が受け取りトレーに分ける。小腸・胃、まだミチルは絶命しない。鳩尾まで腕が入っている。「ピクン」
ミチルが跳ねた。
シェフの手には心臓が握られていた。
膀胱・腎臓・肝臓と全て膣から取り出した。作業出来る穴の意味が

分かる
「直ぐに隣の病院に運べ。」
大型の台車のクーラーボックスに入れられたミチルの内臓は病院に運ばれた。
隣の病院ではドクターが乳房の移植美容施術をしていた。
アジア系の若い女性の小さな胸を切り取りマイの大きな胸を取り付けている。
シェフも副業は医者である。
組織の収入源は密売・臓器売買・殺人依頼。武器製造。薬の開発製造。東南アジア支部の有るこの国も組織が国を動かしている。
独立に現大統領がクーデターを起こした時も、現在ゲリラと戦う資金、武器も組織が提供している。
東南アジアの小国ながら地下資源が豊富で観光も盛んなこの国に眼を付けクーデターを起こした。
「おい。後は眼球を取り、溶液につけて居てくれ。俺はレストランに戻る」
若い医者に後処理を任せ、シェフは処理室を出ていった。

宴5オークション開幕

「今からオークションに移ります。まずは純血の証、処女膜を6人分。アジア系・白人・南米系各2人。台に付いている番号で入札願います。」
ステージの上にはリカ・リサもお尻を上にして股間には特殊なクスコを挿入され膣をカメラで写されている。
全裸で赤子のおしめを換える体制で台に固定されている。
猿轡を噛まされ、眼を見開きカメラを見つめている。
「ナンバー1．日本人」
「オークション開始」
モニターに膣内映像、顔、金額が写る。

ナンバー1はリカだった。
モニターの数字が伸びている。
「コンコン。決まりました。D席マリー夫人。」
白人の老婦人が落札した。
拘束された、リカにシェフが近づく。
拡大鏡の付いた眼鏡にカメラが付いている。クスコの中にピンセットと小型のメスを挿入してリカの処女膜を切り取っていく。
膣内の敏感な部分がチクチク痛む。
「むぅぅ。」
リサの顔がゆがむ。
5分後に全て取り除かれて、ピンクの膜のような紐の様な物が銀の皿に乗せられた。
「ナンバー2日本人」
リカの番が来た。
横のリサが処女膜を取られていたのを見ていたリサは怯えている。
「コンコン。D席マリー夫人」
6人中6人の処女膜はマリー夫人が落札した。
「今回も婦人が全部落札だな。さっきの子宮とか、何に使うのだろな」
「キム、其れこそ自由だよ。コレクション・漢方何でも使うのだろ？其れで宴が成り立つのだろ。」
リカから係員に台に固定されたまま運ばれて行った。
廊下で分娩台に固定されたユミと目が合う。ユミが気まずそうに顔を背けた。
眼でリサが追うとユミの股間に肉の蝶が見えた。
「次にアンダー30、オークションです。全部で5体。アジア1.ヨーロッパ2.南米1.です。
一体購入でも可能ですし、肉体の一部でも可能です。
ナンバー7・日本人」
ユミがコールされた。

ユミの股間の肉蝶がモニターに写る。
「コンコン。A席デゥ大統領一体購入」
ユミの拘束台はデゥ大統領と言われる色黒の顔に白い髪、白い口ひげを蓄えニコニコ笑っている中年のテーブルに連れて行かれる。
「コンコン。D席マリー夫人。両乳首。ラビア。購入。」
全員が落札された。
隣の乳首と肉ビラ、クリトリスを購入された、白人の元に助手が近づき腕に薬を注射した。
直ぐに薬は効き、トロンとした瞳でメスの刃先を見つめている。
白い肌にピンクの乳首。助手が乳首を持ち伸ばす。女は動かない。
乳首と乳輪の境を切り離す。
「はぅ」恍惚感に浸っている。
両乳首を切り取り、前方に廻り、股間に手を伸ばす。肉ビラを摘み引っ張る。彼女も肥大されたのか大陰唇よりも肉ビラの方が大きい。
延ばすと５ｃｍ近くある。根元を切り、トレーに乗せる。
両方の肉ビラが肉体から外れ、銀の器に乗る。
最後にクリトリスを指で摘み延ばす、「あああああ」伸びた苦痛に声を上げている。
スパッと根元から切り離す
「はぁあああああああああああ」
快楽に身もだえている。
一通り切除された女達は助手に運び出される。
残されたのはユミと南米系の女性だけ。南米系女性のテーブルには緑の軍服姿の黒人が座っている。
「これから、ツイストが始まります」
声が大きいかもしれません。ご了承下さい」
ユミの拘束台、尻の部分が上がり、足が下に降りて頭が、下がっていく。
丁度、デゥ大統領の顔に近い高さに調整された。
婦人がユミの横に立ち、徐にユミの乳首を含み転がし始めた。

「あぁあん」
大統領は伸びたユミのクリトリスを口に含み舌先で転がす。
指を膣口に差し入れかき回す。
「あぁ」
「グナナンンンナ・・・」
「ノーーゥ」
頭を横に向け南米系の女に向ける。腰を上げて頭を振っている。
瞳に涙を溜めて唇を噛みしめている。股に顔を埋めていた、軍服の
黒人が何かを噛んでいる。
「ガァァァァ」
顔を上げた口元に血が付いている。口から女の股間に紐みたいな糸
が繋がっている。
「アッ」
ユミの股間、クリトリスに激痛が走る。頭を下げ股間を見る。眼下
にクリトリスに歯を当て引っ張る、白髪の老人。
「え？いや・・やめて・・・」
「ひぎぃ」
「いたーーい！」
2、5ｃｍのクリトリスの根元に噛み顔を捻る。
ユミは腰を浮かし噛みきられずに口から離れずにしている。
「ゲェッッッッァア」
白髪の口から紐が股間に伸び唇に肉片が付いている。
痛さで腰を振り悶える。
「あぁあっそこはいや」
「いぎぃ」
乳首を転がしていた婦人が乳首を噛み引っ張る。
乳房が千切れるのを拒むように伸びる。
「あぁあ」
乳首が乳房と離れる。
「痛いよ・・。痛い痛い」

子供の様にユミは泣きじゃくる。
「イタイ・イタイネ」
大統領の好きな日本語のようだ。
助手が近づき肉ビラを伸ばす。
根元にメスを当ててスーっと切り裂く。
ユミはクリトリスに痛さが行き肉ビラまでは分からない。
左右のビラを切り取られた。
残りの乳首を引っ張られてメスで切り取られる。
「あぁ」
止血のパッチを乳房に張られて、股間は血で濡らし、係員に運ばれて行く。
「あの大統領も好きだね。あれ」
「あちらの大佐もそうだよ」
「大統領はカリバリズムの残る部族出身だよな」
「幼少期まで有ったようだぜ」
「忘れられないのかな？」
「どうだろうね？」
キムとリュウが真っ赤なワインを口にしながら語り合う。
宴６　アイとアマネ
「次はオーバー３０です」
「アジア２人白人１人南米系３人です」
透明なボウルに入れられたアイとアマネが運ばれて来た。
全員が眼をトロンとさせている。例の注射を打たれている。
「D席アジア２人・マリー夫人が落札。箇所女性外性器一式」
「B席白人１人全身マソン大佐が落札。持ち帰り」
「A席デゥ大統領落札。南米３人
全身持ち帰り」
アイとアマネ以外はステージから運ばれた。
カメラが二人に寄る。
助手がアイの足を持ち引っ張る。

ボウルの中でスルンと尻を上にするように滑り性器が上に来るように廻された。
シェフがメスと鉗子を持ち近づく
カメラが性器をアップに写す。
肛門の上、大陰唇の下、ギリギリにメスを突き刺す。
「アァン」
アイが首を振る。
大陰唇に沿ってメスを走らせる。
右の大陰唇を恥骨にメスが走る。
恥骨陰毛の部分は薄く削ぎ、左に大陰唇に沿って肛門に走らせる。
クリトリスを持ち上げると血を滴らせ外性器が体から外れる。
「おマンが目の前に有る。誰の？
ビラビラが少し黒い」
自分の性器を笑いながら評価している。
「ぐぅ」
急に眼に力が戻りガクガクと震えだした。
薬の効力が切れた様子だ。
「がぁあああああ」
大絶叫が会場に木霊する。
「大丈夫だ」
直ぐにシェフが腕に注射をする。
「シェフ、最初の注射から切れるまで何時間だった？」
シェフにリュウが聞くと
「6時間だな。」シェフがインカム越しに伝える。
「もう一人も切れる時間じゃないか？」
「観客には悪いがライブではむりだろう」
横のアマネが幸薄の顔が、心配そうにアイを見ていた。
「覚醒していた。バックに戻る。リュウ、謝罪を頼む。」
「分かった。シェフ。後処理は頼む」
アマネとアイを乗せたボウルを係員が押して会場をあとにする。」

「キム。謝罪してくる。」
リュウが会場のマリー夫人の所に近より訳を話す。
婦人はニコニコして話を聞き頷いた。
「ショーは全て終わりです。レストランの名物海鮮料理をお持ちします。お楽しみ下さい。お嫌いな方は牛肉等肉料理もございます。ウェイターまでお申し付け下さい」
各テーブルに山盛りのカニ、エビシャコが運ばれる。
「キム、謝ってきたよ。」
「どうだった?婦人は?」
「頷くだけ。」
「逆に怖いね」
二階席端のギャングのボスが、ウェイターに声を掛ける。
「此処のカニは格段に旨いな。どこで捕れたやつだ?」
「天然では無く、このレストラン専用の池で養殖しています」
養殖池の縁に水面に頭を出したナツコが繋がれている。
水中では乳房にカニがへばり付き肉を啄む。裂けた股間の穴から、シャコが這いずり出す。
「あぁぅうん」
まだ薬は切れずに快感の中にいた
最終章　半年後
ユウとマイは空港ロビーで出国をするため、椅子に座っている。
宴後に眼をさますと大きな胸はなくなりBカップの胸に包帯が巻かれていた。傷口が塞がり退院許可が出た。
黒人ナースのジニが封筒を持って病室に来た。
「もう退院ね。分かってはいると思うけど此処での出来事は他言よ。喋ったら爆発するから。家族もろとも爆死するからね。後、子供が出来たら絶対に此の住所の病院に連絡。他の医者が調べたら即爆発。後はコレ、借金の差額の余り、お金が必要なら、その連絡先のジュンに有って。」
「さあ着替えて、空港まで送るわ」

たわわに有った胸はＢカップに成っていた。
ジニに目隠しをされて二人は看護しに車いすに乗せられ駐車場に連れて行かれた。
「空港まで取らないでね。」
あの黒人の声である。
ジムが空港まで送った。
空港の駐車場につき降ろされる。
「２０秒経ったら目隠しをとってもオッケーよ」
３０秒ほど経ち目隠しを取り二人で空港に入った。
ロビーの椅子に座り、封筒の中身を見た。
２百万の現金とメモが入っていた。メモには住所と電話番号。
封筒をバックに詰めて出国ゲートに入り、日本行きの飛行機に乗った。飛行機が飛び立ち初めて二人は見つめ合い、涙した。
ＣＡが飲み物を置き、メモをユウの膝においた。
メモを開くと「組織の監視は続けるから」と書かれていた。
ユウは初めてアイのアルバイトが危険かを知った。
東京のスタジオでは雑誌グラビアの撮影中だった。
栗色に染めてパンツスーツ姿のジュンがカメラマンの横に立ち撮影を見守っている。
眼鏡をコンタクトに変え、雰囲気も変わったように見える。
「ジュン！」
メグが近寄る。
「大分、イメージが変わったね。
でもそれ以上の派手はヤメテね。
目立たず、が基本だから。はい、アノ子の映像よ。楽しみなさい」
ＤＶＤを渡しメグはスタジオから出ていった。
夜、マンションの部屋で映像を再生した。ナツコが犬に犯されるシーン、犬のペニスが腹を突き破り射精をするシーンで何度も登り詰めた。
ＤＶＤには宴が全て映像化されて写っていた。

新宿のホテルではモデルのメグミが口を極限まで広げてガイのペニスをくわえている。
白目を剥き、鼻水を垂らして頭を捕まれ上下に揺られている。
上下に合わせて喉が膨らむ。
メグミはジュンの最初のターゲットだった。ジュンの素朴さをバカにしていたので近づき安かった。
メグの指令でジローの経営するホストクラブに誘い込むことだった。
飲み会の2次会で誘い、後は店のホストがメグミをドラッグ、酒で借金漬けにした。
お決まりのコースで風俗に行き。
逃げたのをシンジ達に捕まり海外配信の動画を撮影している最中だった。
シンジは撮影を見ながら写真集を開き
「次はこの子が良いなぁ。アイドルだし、レイさんも喜ぶだろうな」
写真集には有名なアイドルが笑いながらビキニで飛び跳ねていた。
「嫌！ヤメテお願い」
頭に黒い頭巾を被せられた裸のスレンダーなアジア人が無き叫んでいた。
横には東南アジア系のグラマラスな女。
「おい。釣りを始めるぞ。」
頭の頭巾が取られた。
カメラが二人に寄る。
周りは真っ青な空と紺碧に近いブルーの海の上。
クルーズ船には南米組織のボス達。
アマンダとマリアの愛人のボス達である。
「誘拐は俺たちの十八番でね。アマンダとマリアに会いに行ってくれよ」
頭巾が取られて現れた顔はアジアンマフィアのボスの愛人だった韓流女優と東南アジアのモデル達だった。股間の針に鰹を付けられて女優、モデルと落とされた。

波間で二人の頭が見える。
後方の波間には鰭が見え二人に近づいていた。
二人はシャンパンを飲みながら獲物が食いつくのを待った。終わり。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n1847gl/

暴虐の宴

2025年7月29日02時03分発行